ガーディアンが行く場所　オレは臆病な君を守り続ける

孤独なバカ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

たった一人たった永江空太。そこで一人の臆病なヒロインと出会い人生が変わって行く。

目次

プロローグ 1
β版最終日 7
リンクスタート 12
デスゲームの始まり 17
ボス攻略会議 21
一層ボス攻略戦 28
ギルドguardian 35
黒いネコと守護者 42
生きる意味 53
日常、そして暗転 64
クリスマスボス 71
帰るべき場所 81
サチの願い 92
繋ぐ想い 103
我が家 109
食事 117
面倒ごと 129
迷いの森にて 141
竜使いと守護者 151
シリカ 157
死の恐怖 164
犯罪者ギルド 170
入団条件 182
釣り 193
圏内事件① 201

プロローグ

オレはずっと一人だった。

親は離婚後母さんのところに引きとられた。そして母さんはオレが3歳の時に事故にあって死んだらしい。

そしてオレは志願して施設に預けられた。通帳には多額のお金が入っているとじいさんとばあさんに教えられていた。だからオレは一度も通帳を見なかった。じいさんとばあさんは優しかった。困った時は助けてくれた。施設に行くことになったのは、2人とも末期癌を抱えていたからだ。そして最後に病院で言われたこと。

たった一人でもいいから大切な人を見つけて、好きになりなさい。

その一言が重くのしかかる。

オレにはリアルの友達は全く居なかった。施設に入ってからはパソコンのオンラインゲームにはまっていた。たったリアルは本当に嫌なことしかなかった。

同級生をバカにする奴ら、オレがかばったら孤児を強調してくる奴ら。そのグループを潰したら、オレが叱られる始末。全くふざけている。リアルほどクソゲー以外の何でもない。　しかしオンラインゲームは違う。いじめる奴らは徹底的に潰せばいいし、努

力は絶対報われる。レベル上げを頑張った分だけ強くなれるのは嬉しかった。いつしか学校にも出席ギリギリしか行かなくなった。

しかし運動はしてないわけじゃない。今でも剣道をやっている。街にある小さなところだが、先生の腕は確かだった。おかげさまで、県大会を個人的に申し込み、学校を別で三連覇。中学校三年生では全国大会優勝している。

しかし、オレは何かイマイチ物足りなかった。

剣道では全国大会優勝した。しかしあまりに手応えが最後の年はなかった。

大会後のインタビューのときに感じたことだ。

達成感も何もない。ただ対戦して勝っただけだ。インタビューが終わった後、オレはあることをつぶやいた。

「何も面白くない。」

刺激が欲しかった。まだリアルでは面白いものは何もなかった。

すべてがテンプレのクソゲー。

オレはあの日まではそう思っていたんだ。

「ソードアートオンライン?」

朝、珍しくニュースで面白そうなゲームの宣伝をしていた。ＶＲＭＭＯと言う世界初の技術で茅場晶彦が開発したゲームらしく名前の通り剣のみ魔法はない。

……ふーん

施設の中で見ながらつぶやく。

そういえば最近β版が配られるって言ってたな。

ナーヴァギアが施設に寄付されていたことを思いだす。

やってみようか。

オレはインターネットからソードアートオンラインのβ版のホームページにアクセスしβ版にアクセスしようと思ったとき

「空、お客さんだ。」

「悪いちょっと忙しい。」

施設のじいさんが呼びにくるがそれどころではなかった。

「どうせ、ゲームでもやっとるんじゃろ。それよりもおぬしソードアートオンラインって知っておるかのう?」

その言葉にオレは手を止める。

「今なんていった?」

「だからソードアートオンラインに興味がないか?」

すると奥からスーツ姿の男がやってきた。少しやせておりいかにも研究室にいる助手の男みたいだ。

「君が永江空太君だね。」
「……えっと？」
「いや～すまない。私の名は茅場晶彦って言えば分かるかな？」
「……は？」
　オレは一瞬固まった。そしてパソコンのホームページを見ると
「……まじかよ。」
　パソコンと同じ男の人が立っていた。しばらく見ると
「……こんな孤児院に何をしにきたんですか？」
「だから君に会いに来たのだよ。空太君。」
　ニコニコと笑いながらソフトらしきものしか一つ渡される。
「えっと、ってソードアートオンライン!!」
「君にはβ版の中で自由に行動してもらいたい。」
「は？」
　オレは固まる。そんな中でも茅場晶彦は説明を続ける。
「君は今年の剣道の全国大会で優勝していると聞いてな。空太君のデータが欲しいんだよ。」
「……つまり、剣道のデータが欲しいと。」

「いや、剣道をしている人がＶＲの中でも動けるかというデータが欲しいんだよ。」
　あぁそういえば、
「んでなんでオレ？普通なら」
「よくテレビである、全国大会の優勝者のデータを取りましたって言う。」
「あぁなるほど。」
「それに君はあまり学校に行っていないと言うじゃないか。だからデータをとるにはちょうどいいと思ってね。」
　すると少しだけビックリする。そこまで調べているのかよ。
「それに報酬だって用意する。ソードアートオンラインの正式版パッケージも渡そう。それにこれくらいでどうだろう。」
　すると小切手を渡されると
「……あの一桁違うんじゃないんですよね？」
　そこには１Ｍ分つまり、百万円の小切手を渡されていた。
「あぁ、それは一応毎日実験のデータ、一応毎日実験台として拘束するからね。その代償だよ。」
　あぁなるほど。ならしょうがないか。
「まぁ、それならいいですけど。」

「助かるよ。それじゃあこの日程で動いてくれないかな。」
すると紙を渡される。そこには
「……うげっ」
ソードアートオンラインのやる時間が長すぎた。午後のほとんどがゲームだ。
「……」
まぁいいか。ソードアートオンライン。このゲームは
リアルみたいなクソゲーじゃ無ければいいな。

β版最終日

茅場晶彦の訪問から二ヶ月半が経った。ソードアートオンラインのβ版が終わる最終日、オレは隣にいる片手剣使いの男と第１０層のボス攻略戦に来ていた。

「ファ～眠い。」

「お前また寝てないのかよ。」

オレは隣の黒い装備を着た奴に苦笑してしまう。このゲームではずっとコンビを組んでいた。いいアイテムをオレとこの男で独占し続けていた。ボス攻略戦のラストアタックボーナスを９階層中オレ３つ隣の男は５つ取っていた。

ずっとこの世界に入ってからずっと思っていたことがある。まずはこのゲームは意外と上級者向けなのだ。その理由の一つにレベルの上がりづらさがある。

レベル上げはどこのゲームでも同じように上がるって言う訳ではない。特にオンラインゲームでは普通のＲＰＧよりも上がりにくい印象はある。

そしてＶＲの世界ではリアルの自分の強さがあれば強くなる訳ではない。自分の脳の反応速度によって動きが変わる。つまりオレは隣にいる男に一度も勝ったことがなかった。デュアルにしろ脳の反応速度が早すぎる。たぶんこいつはこれから正式版に

なってもトップ集団に入ることだろう。
「そういえば、正式版でもパーティー組むか？キリト。」
　黒ずくめの男に向かって言う。
「まぁいいけど。」
「良かった。さすがにＭＭＯやっているのにソロプレイとかいやだしな。それにオレのスキル振りじゃなぁ。」
「確か、盾スキルと隠蔽、それと片手剣だったよな。」
「あぁそして最近バトルヒーリング覚えたし。この次は重装備スキルでもとると思ってる。」
　オレは最前線でタンクとして働いていた。まぁ昔からゲームだったらタンクキャラばっかり使用していたからな。
「オレが支えて、キリトが攻撃するんでラストアタックになったら。」
「早いもの勝ちだな。」
　とニヤリと笑いあう。
「んじゃ、始めようぜ。キリト」
「了解。」
　ボス部屋に入ると薄暗い部屋に入る。するとそこにはサムライ型のボスが立ってい

た。
「……カタナスキルか。厄介だな。」
「範囲攻撃持ってるから、気をつけろよ。」階層ボスに向かって走り始めた。
　回復アイテムをいくつも使いながらも数時間の死闘のすえオレたちは階層ボスに勝利した。
「お疲れ。」
「あぁ。体力さすがにきついな。かなりレベル上げてたのに。」
　最終的のレベルは三十八これは全プレイヤーの中で一番高いらしい。まぁニートみたいな生活しているからな。
　体力も回復アイテムも明日にはリセットされる。そう思ったので暴れようと考えたのでキリトを誘ってやり始めたことだったが。
「でもたのしかったよな。」
　キリトがこっちを見て言う。
「あぁ」
　心地よい疲労感、そして
「なんか、このために生まれてきたって感じだな。」
「大げさだなー」

　するとオレはアイテム欄を開く。今回のラストアタックボーナスはオレの元にあるので見てみると
「……？ギルド申請届け？」
「は？ギルドってあの？」
　オレは頷き、アイテム欄の説明を見てみる。
　正式版ソードアートオンラインのギルドを設立できる
「……は？」
　オレは固まってしまう。このソードアートオンラインでは三層にギルド設立できるまで待たないといけない。つまりは
「これぶっ壊れアイテムじゃねーか。」
「どんな効果だったんだ？」
　オレはキリトにアイテムを見せると苦笑いしながら。
「ギルド設立したいやつからしたら大金払っても欲しいアイテムだな。」
　キリトは苦笑している。
「ギルドか。設立してもいいけどなぁ。」
「そのときはオレも入ろうかな？」
「今はたてるつもりはないけどな。」

ギルド団長か。オレには向いてないし。
「それなら、作るときは誘ってくれ。オレも入るから。」
するとメンテナンスの届け、つまりβ版の終わりの知らせが来る。
「じゃあ、オレは落ちる。また正式版で」
「あぁ、今度会うときは一層ボス部屋だな。」
「んじゃな。」
オレはログアウトボタンを押す。
だけどここまでだったんだ。オレがいや皆が
この世界はゲームだと思ってたのは。

リンクスタート

ソードアートオンライン最初の日

この日は後々に記録に残る一ページになる。

この日を楽しみにしていたらしい男性がインタビューをしているアナウンサーに張り切って話している。

確かに世界初のＶＲＭＭＯ、この事実に日本はもちろん、世界中のゲーマー、いやゲーマーじゃなくても世界中の人が注目しているゲームだろう。

ソードアートオンライン

今日のニュースはずっとこのゲームの話題でいっぱいだった。まぁ最近ずっとこのゲームのニュースばっかりだったのでいつも通りなのだが。

配信時間直後にログインするプレイヤーが多いと予想されているので、少し時間が経ってから入る。

「リンクスタート」

オレはナヴーギアを着けてゲームの中に入った。

β版の読み込みが終わった中でオレは街にワープした。

戻ってきたな。

そんな感覚があった。リアルだったらたった数時間前に１０層ボスに挑んだところたった。しかし一層のはじまりの街に入るのはログインするところ以外だったら数週間ぶりだった。

さて、オレも行くか。

キリトに教えてもらった裏通りにある武具屋に行く。安くていい防具を置いているらしく、この世界だったら最初に訪れておきたかった。

「ちょっといいかな？」

オレは誰かに話しかけられて足を止める。するとそこには３人のプレイヤーが立っていた。

「……なんですか？」

「いやー少しお金貸していかないかな？ちょっと買いすぎちゃてさぁ。」

ニヤニヤとオレの方を見る３人組。こいつら新期プレイヤー狩りか。

「……はぁ。」

オレは無視して行こうとすると

「おい、お前無視するなよ。」

「……モブが黙っておけよ。」

すると、３人集が切れ始める。それを無視しようとしたらシステムコマンドが目の前に出てきた。

ザザから３対１のデュエルを申し込まれました。承諾しますか？

野郎ここまでやるのかよ。

ここはオレは拒否してもいいだろう。ただオレは無視できなかった。

オレはそれを承認ボタンを押す。そしてすぐに六十秒のカウントが始まった。

するとすぐに初期ステータスを振り、スキルを設定する。

片手剣スキルこれだけで十分だろう。

そしてすぐにその瞬間はやってきた。六十秒のカウントダウンが終わりＤＵＥＬと言う文字が見えた。

そしてすぐオレは武器を見るとこの街で買った武器だった。確かにここの武器は今の武器よりは威力は確かに高い。だけど欠点が一つあった。

オレはデュエルを送りつけてきたやつの剣が光ってくるのを見るとすぐに一歩下がる。ソードスキルと言うこのゲームのスキルを使ってきた。

そしてオレは少し時間を取ってから同じようにソニックリープを放った。ソードスキルを放つと少しの間はスキル硬直で動けなくなる。本当はＨＰを全損させてもいいんだけど、こいつらはなれているのでここでさせなくさせるのがいいだろう。

オレが放ったソードスキルは相手の片手剣の根元に当たり
パリン
剣が結晶と変わる。この世界では様々の物に耐久値がある。剣、食材などの多くの物だ。はじまりの街で買える武器はすごくもろいのだ。
「なっ!」
「舐めるなよ。てめーら。」
オレは同じように短剣、両手剣の奴らの武器を破壊していく。そして三分後完全に決着がついた。
「武器を変えてまで続けるつもりなら付き合うけど、その武器も破壊できるぞ。これでもまだ続けるか?」
こいつらは防具まで金をかけていた奴らだ。あの店でもかなりの武器や防具だったのでたぶんもう初心者狩りはしないだろう。
「……アイ・リザイン」
するとデュエルの終了と勝者を名前が書かれた紫色の文字列がフラッシュした。
すると歓声が聞こえる。どうやら目立っていたのか多くの人がオレの周りにいた。
「すげー!!ナイスデュエル。」
オレは軽く頭を下げる。そして目立ちたくなかったのでこの場を立ち去ろうとする

と、

リーンゴーン、リーンゴーン

と大ボリュームのサウンドがなり、目の前の景色が変わった。

この時からこの世界はゲームではなく、リアルの命をかけた本物の世界になる。

デスゲームの始まり

俺が転移した先ははじまりの街、つまりは転移されていなかった。

「なんだ？」

どうやら周りの雰囲気が変だ。特に話される話題はログアウトボタンがウインドウにないらしい。

なんだバグか？

俺もウインドウを開いて確認すると確かになかった。

それでどうやら強制転移とログアウトができないことで混乱を招いている。

おかしい。

俺は慌てもせずずっと転移されて慌てている人の流れを見ていた。

ログアウトできない。強制転移。

あの男がそんなミスをすることがない。

俺は何度も近くで茅場を見てきた。

とくにＶＲＭＭＯ最初のゲームで海外までもが注目しているゲームなのに最初に致命的なバグを起こさせるか？

しばらく経つと上空に真紅のフード付きローブをまとった人らしきもの。いや巨大な真紅のフード付きローブをまとった透明人間が現れた。
「プレイヤーの諸君。私の世界へようこそ」
すると誰しもがそこに目線が移る。
「私の名前は茅場晶彦。今やこの世界をコルトロールできる唯一の人間だ。」
すると誰しもざわめき始める。メディアにはめったに出ないことで有名だったのでさすがにプレイヤーも驚いていた。
ざわめきが収まらないままで茅場晶彦らしきローブの男が言う。
「諸君らの中に気が付いているものもいるかもしれないが、諸君らのメインメニューからログアウトボタンは消失しているが、それはシステムの異常ではなく、ＳＡＯ本来の仕様である。繰り返す」
「……はっ？」
オレは固まる。分かっていてもさすがにこの推理が当たっているとは思わない。
ログアウトできない。それが仕様だとこいつはいうのか？
「諸君らはこのアインクラッドの頂に立つまで自発的にログアウトできない。また、外部の人間の手による停止・解除もあり得ない。もしそれが行われた場合、ナーヴギアの信号素子が発する高出力マイクロウェーブが諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させ

る。」

こいつは何を言っているんだ。

その後も茅場の説明がいろいろあったがまったく耳に入ってこなかった。

ただたった一つの事実。

ＨＰが０になったときにリアルの俺も死ぬ

その事実だけでお腹いっぱいたった。

そしてたぶん本当に死ぬだろう。

「それでは、最後に、諸君にとってこの世界が唯一の現実であるという証拠を見せよう。」

するとオレが開こうとは思ってもいないのにウィンドウの中を開く。するとそこには２つのアイテムがあった。

一つ目はβ版で手に入れた。ギルド設立用紙そして手鏡。

オレは手鏡をオブジェクト化して出してみるが何も変わったところがない。

すると一瞬視界が光に覆われてすぐに消える。

そしてオレはオブジェクト化しばっなしだった手鏡を見て気づく。

これリアルのオレじゃないか。

いつも見ている姿にオレは素直に認めるしかなかった。

この世界はゲームだか現実なんだと。

だけどオレはそれでもすごくワクワクしていた。
リアルじゃオレはつまらない生活をずっとしていた。
でも命がけの戦いがこれから始まるのだ。
正直オレはこのゲームに負けて死んでもいい。
もともと孤独な身だ。
誰もオレが死んでも悲しむ奴はいない。
だけどオレは死ぬつもりはない。
だけどあの茅場晶彦に一発殴らないときがすまないしな。
それに約束くらいは守らないとな。
キリトと約束した
第一層ボス会議でまた会おう。
そうだな。とりあえずまずは一層ボスだ。
「絶対にクリアしてやる。このゲームを。」
オレは皆が混乱している中防具売り場へと走る。
さて楽しませてくれよ。茅場晶彦。

ボス攻略会議

1ヶ月で２０００人が死んだ。
アルゴからその情報を聞いた時頭が痛くなった。
俺はベータ版をしていたので記憶をたどりこの階層のレベリング場所、モンスターの特徴。そしてマップデータをクエスト情報を無料配布するようにアルゴに伝えた。
俺はベータ版との違いについても書いたのだがベータ体験者は３００人が死んだ。
「そう上手くはいかないか。」
「どうしたんだ。青の騎士。」
そこにいたのは一ヶ月パーティーを組んでいたエギルが俺の隣に来る。青の騎士とは初日のデュエルがなぜか風の流れで広がり俺につけられたあだ名だ。
「その名で呼ぶなよエギル。そんなのただのベータテスターで少し有利だっただけさ。」
「でもユニバースって呼びづらくないか？」
「まぁ呼びづらいけどさ」
俺はため息をつく。
「ベータ版の知り合いにわかりやすいようにベータ版の時と同じにしたんだがな。正直

反省してるよ。」
「まぁ、そうだろうな。しかしそのキリトというやつは生きているのか。」
「生きてると思う。石碑に全く同じスペルの奴がいたからな。情報を買ったからあっちにも俺が生きていることは知ってると思うぜ。」
「……じゃあ、明日であんたとはお別れだな。」
　エギルのパーティーはゲーム好きの集まった集団だったがナーヴァギアを使ったことは全くなかったのでレクチャーを頼まれていた。明日はボス攻略会議がある。これで役目は終わりってことだ。
「あぁ。1ヶ月お世話になった。これはほんの少しだが。」
　俺はトレードウィンドウを出してレアアイテムを数個その中に入れる。
「おい。お礼をいうのはこっちだぜ。しかもこれ売りに出したら数万コルはいくぞ。」
「別にいいさ。こんど俺たちが困った時助けてもらえれば。その前料金ってことで。」
「まぁ、お前がいうんだったら引かないだろうし。ありがたく受け取らせてもらう。」
　するとトレードウィンドウの承認されるとすぐにフレンド申請ウィンドウが出される。
「ただしこのフレンド申請を承認すればな。」
「まぁ前に約束してたし別にいいけど。」

俺は承認ボタンを押す。するとエギルは驚いたように俺を見る。
「おいおい。もっとしぶると思っていたが。」
「約束は守るのが俺の流儀だからな。ちゃんとしたやつなら約束は守るさ。」
「そうかよ。でも明日はボス攻略会議だからレベリングもほどほどにな。」
「大丈夫だ。きょうの攻略で15レベまで達したしな。」
「じゃあ今日はもう寝るのか？」
「あぁ今日はもう寝るよ。おやすみエギル。」
「あぁ。またな。」
俺は寝室に戻る。今日のうちに睡眠不足が解消できればいいんだけどな。
夕方のトールバーナの広場にてボス攻略会議があるといわれたのは昨日の夜だった。
どうやら最前線にいたとあるパーティーが見つけたらしい。
「はーい！それじゃあ、5分遅れだけどそろそろ始めさせてもらいます！」
ひとりの男が声を張り上げて言う。
「オレは《ディアベル》、職業は気持ち的に《ナイト》やってます！」
すると笑い声がおこる。
「さてまずは6人組のパーティーを組んでくれ！」
「うじゃ。いままでありがとな。」

俺たちは7人パーティでいままで戦ってきたためどっちにしろ誰かが抜けないといけなかった。
「あぁ、またパーティー組もうぜ。」
「機会があったらな」
俺は手を振り歩き出す。
さてアルゴからの情報だと基本一人きりでいるらしく女顔らしい。
するとフードを被っている人と話している男がいた。俺はそれを見て思いっきり飛ぶ。
「すいません。パーティー枠空いてませんか?」
とりあえず話してみる。これで外れていたら恥ずかしいしな。
「はい。大丈夫です。えっとアスナさん構わないですか?」
「別にいいわよ。」
するとＫｉｒｉｔｏからパーティー申請されましたと言うアナウンスが出る。やっぱりそうだったか。
承認ボタンを押しキリトも気づいたのだろう驚いたような目をしてる。
「久しぶりキリト。」
「ユニバース。お前生きてたのか?」

「あぁ。とあるパーティーのコーチとしてずっと生き抜いてきたぜ。」
「……知り合いなの？」
アスナと呼ばれたフード人が反応する。
「まぁな。とりあえずユニバース。盾役だな。よろしくな。」
俺も座る。その瞬間
「ちょお待ってんか、ナイトはん」
するとサボテン頭の男が言う。
「わいは《キバオウ》ってもんや。こん中に５人から１０人詫び入れなあかん奴らがおるはずや。」
キバオウが言いたいことはよく分かった。
「それは元ベータテスターの人たちのこと、かな？」
「決まっとるやろ。」
「発言いいか？」
オレが手を挙げるとディアベルからどうぞと言われる。
「まずオレの名前はユニバース。そこのサボテン頭が言うようにベータテスターだ。」
すると皆の目線が俺に集まる。するとオレのことはこの中の奴らに知っているやつがいるらしく青の騎士だとかとザワザワしている。

「まずサボテン頭の奴に確認だ。簡単にいうとお前は元ベータテスターたちが２０００人を殺した張本人と言うのか？」
「そ、そうや。」
　素直に元ベータテスターが出てきたことに動揺しているのかサボテン頭のおっさんが気圧された。
「アホか。まず死亡者２０００中３００人は元ベータテスターだ。」
　するとまたザワザワと声を挙げる。
「そして、このガイドブックに見覚えはあるか？」
　オレはネズミ印のガイドブックをアイテムストレージからオブジェクト化する。
「あぁ、知っとるが、それがなんや？」
「これ、オレと数人の元ベータテスターの情報で作ったんだけど役にたたなかったか？」
　するとまたザワザワとし始める中ディアベルは何か納得したように頷いた。
「これでも情報もあったのに２０００人が死んだのは、ベータテスターにレベリングも知らない奴らがいたことと他のオンラインゲームのギルドが招いた戦線離脱のタイミングを誤ったかのどちらかだ。正直俺らは自分も生き残る為にレベリングしたり、生産スキルの熟練度をあげたりするのに精一杯だ。」
　オレはキバオウを睨みつけて

「それでも情報を与えていてその死者を元ベータテスターのせいにするのはおかしくないか？死者に聞くことはできないけど、必ずその人に原因はあるんじゃないか。」
　するとキバオウは黙る。オレはディアベルの方を向き
「ディアベルさんここからはオレに任せてもらっていいか？指揮や命令は任せるがベータ版の一層ボスはオレが戦ったことある。新規のガイドブックにも書いたけどオレが話した方がいいだろう。」
「あぁ、戦ったことある人があるのは心強い。よろしく頼むよ。キバオウさんもいいかい？」
「……あぁ」
　するとけっこうおとなしくキバオウは下がった。
「じゃあ、ユニバースさんよろしく頼む。」
「あぁ、ついでに言っておくがこれはベータ版の時のデータで今回も同じかはわからない。それを頭に入れといてくれ。それじゃ、ボスについて説明する。」
　オレはベータ版時の一層フロアボスについて説明し始めた。

一層ボス攻略戦

ボス戦当日、
「分かっていると思うけどルインコボルトセンチメルは喉元しか効かない。だから俺が防御を引き受けるから。」
「分かってるわよ。喉元を狙うのでしょ。」
「んでキリトは周囲の確認。ついでに残りの班の様子の様子を見ていてくれ。」
「あぁ。」
「でもしかしおかしいわよ。ベーターテスターの君が取り巻きって。」
アスナさんが言う。
「ユニバースさんだっけそのβテストで一度戦っているのでしょう?」
「あぁあのときは俺がメイン盾で成功したぞ。」
「てかユニバースがメイン盾で失敗したことがないだろう。」
「そ、そんなに有名な人なの?」
アスナは絶句しているけどキリト
「それであなたはなんでユニバースさんが失敗したことがないことを知ってるの。」

「……」

こいつ壮大にやらかしやがった。

「キリトは爪が甘いな。だから最後のラストアタックも俺にとられるんだよ。あとアスナさんキリトもベーターテスターだよ。」

「そうなの？」

「あぁ、そうだよ。」

キリトは諦めたようだ。

「ついでにこのことは言わないでくれ。俺がベーターテスターがバレるのはいいけどキリトはまだバレてないからな。」

「わかった。けどそんなにベーターテスターが有利なのかしら？」

「ゲームが初心者じゃなければかなり有利だな。」

俺が言う。

「どのタイミングで武器を変えた方がいいのか。クエスト内容がどのようなものなのか分かるんだよ。」

「それに、たぶん経験値の多い狩場もガイドブックを書く前はやりたい放題だしな。でも序盤が有利なだけでいつかは限界がある。それにあぁ言う風に嫌ってる奴がいるからな。」

キバオウの方を見てため息をつく。
「まぁこの話はこのくらいにしてボスの部屋近いな。」
雰囲気で分かる。前線ボスの部屋を知ってる奴の口数が減り顔つきが引き締まってきた。俺たちも発言を控え、歩くと数分もしないうちにボス部屋にたどり着いた。
ディアベルがかなり真剣味を帯びた顔で一言
「行くぞ。」
そして一層ボス戦に取り掛かった。
「スイッチ」
俺は一言いってソードスキルを放つ。
片手剣ソードスキルのスライトを放ち武器を跳ね上げ俺は体を傾ける。
すると隣からものすごい速さで細剣のソードスキル、リニアーを放つフードを被ったプレイヤーアスナがルインコボルトセンチメルの喉元に放たれる。
強い。こいつ何者だ？
アスナというプレイヤーはビーター時代はともかくアルゴに調査を頼んだ事前の攻略に参加するリストに載っていないところを見ると最近実力をあげてきたのだろう。
「ＧＪ。」
「そっちも」

と言いながら次の敵へと向かう。
「ユニバース２本目に入った。」
「了解。」
どうやら順調に削れているらしくキリトからのサインはまだ出ていない。
危なくなったらフォローにいった方がいいが、なるべく今回は見ておきたい。
今後の攻略において多分この中で生き残れるかそして誰が離脱するか見ておかないと多量の死者が出る。
だけども多分このアスナとキリトは将来最前列の要石になるプレイヤーだろう。
「スイッチ」
同じようにスイッチを繰り返し取り巻きコボルトを処理していく。そしてひとまず終わると俺は初めてボスを見た。
その姿に少し違和感を覚える。
なんだか武器がおかしい。細剣ほど細くはないが細い。それに輝きも違うし。俺は似た者を第１０層で見たことがあった。そしたらディアベルが単騎で突っ込む。行動もおかしいしこれはまずい。
「っ!!おいディアベル下がれ。」
「ダッ、ダメだ。　下がれ!!　全力で後ろに跳ぶんだ!!」

キリトも気づいたのか大声で叫ぶしかしディアベルは突っ込んで行く。
俺は持ち場を離れて走り出す。
大きなコボルト、インファルグ・ザ・コボルトロードはソードスキル旋車を放つ。
「キリト取り巻き頼む。」
全力で走ろうとするが、ＡＧＩが足りない。そして俺がくる前にディアベルが吹き飛ばされた。多分死んだだろう。
「ちっ。」
軽く舌打ちをうつ。
でもまずは
「気をひきしめろ。逃げ出したい奴はさっさと逃げろ。俺がボスを引き付ける。」
俺は急いでヘイトを稼ぐ。ここからは持ち場もガン無視だ。
さっきのことで多分混乱するだろう。だからここからは俺らの仕事だ。
そんな中コボルトロードがソードスキルのモーションに入る。だけど
「そんなもんベーター時代に何度も見てきたんだよ。」
俺は範囲攻撃のものは少しバックステップで避けられるところにいる。
ＨＰバーはさっきのやつも見るに単体技を3発まで耐え切れる。範囲はスタンがあるから絶対食らったらダメだ。

そしてソードスキルを全部かわして最後の一振りに真横からスライトを合わせる。
後ろに二人の気配がある。
「スイッチ。」
後ろの声に合わせ後ろに飛ぶ。
すると細剣ソードスキルのリニアーを放つ栗色の女の子とキリトがソードスキルが放っていた。てかアスナ本物の女かよ。
「キリト、タイミングは１０層の通り、メイン盾は俺。アタッカーはアスナさん、キリト頼む。」
「あぁ。」
「わかったわ。」
そして俺たちはワンミスが命取りの状態でコボルトロードに挑み続ける。
わずかながらしかし少しづつボスの体力が減ってきている
俺は命がけな戦場なのにすごく楽しかった。
そしてこの動きが何十いや何百回繰り返した後。
「最後のソードスキル頼む。」
「了解!」
俺がソードスキルを使ってコボルトロードの武器を切り上げる。

すると隣から二つのエフェクトが見える。
ＬＡ持っていけキリト。
二人のソードスキルがコボルトロードに刺さりその瞬間硝子片となす。
犠牲者一名
これで一層ボス攻略戦が終わった。

ギルドｇｕａｒｄｉａｎ

一層ボスを倒したことにより多額のコルとアイテムがウィンドウにうつる。それよりも

「お疲れ。」

オレはキリトとアスナを向きホッとする。

まずは一層クリアか。

オレはウインドウを開きフレンド欄を開く。

そこにはエギルたち全員の名前があった。

「お前一撃も喰らってなかったよな。」

「あぁ、今は布装備だからな。よけやすいんだよ。」

「そういう問題か？」

「そういう問題だよ。あ～疲れた。」

オレは座りこむ。さすがにずっと避け続けているのは気が抜けなかった。

三発喰らったら死ぬ。

それが足を動かしたもととなっていた。

「ユニバース、お前無茶したよな。」
　するとエギルが歩いてくる。
「これくらい普通だろう。このままじゃあ全滅の可能性があったからな。」
　軽く笑う。
「なんでや?」
　キバオウが急に叫び出す。
「なんでディアベルさんを見殺しにしたんだ?」
「そりゃああいつがその程度のやつだったからだろう。」
　オレはあっさり答える。
「それに見殺しなんて言わないでくれるかな。オレはちゃんと言ったはずだぜ。下がれってな。それを無視して突っ込んだのはあいつだぜ。それに今回オレがリーダーやっていたら全員で囲んでフルアタックだ。それなら一番危険なところを早く抜け出せるからな。」
　オレはだいたいディアベルが何をしようか分かっていた。
「……ディアベルはボスのラストアタックを取りに行ったんだろ。自分がいや自分のパーティーが生き残るために。そしてずっとリーダーでいるためにな。」
　オレはため息をつく。

「多分死ぬ可能性はあるって自覚していたんだろうな。」
　オレはため息をつく。
「ディアベルが抜けたことはかなり痛いけどあんたらは誰かが死ぬと思っていなかっただけだろ。」
　すると数人が目を伏せる。
「簡単なことだ。あんたたちはどこかで一瞬でも油断したんだ。誰も死ぬことがないとな。正直ボス戦に向いてねぇんだよ。とくにキバオウ。そんなこと誰かの責任に押しつける暇があったら生きているお前らのパーティーメンバーを守ることを考えろよ。」
　オレはキバオウに向けて殺気を放つ。
「死んだ奴は戻らないんだよ。誰かの責任にするのは簡単だけど自分の仲間を守ることはそんな簡単なことじゃねぇぞ。」
　オレはウインドウを開きパーティー脱退のアイコンを押す。
「んじゃなキリト、アスナさん、エギル。また二層ボス攻略会議で。あと次の街のアクティベートしといてくれ。アルゴに次の街がどこにあるのかわ伝えてあるからな。」
　オレは歩き出す。あの二人は将来有望株として攻略の中心になるだろうし。オレが近くにいると邪魔だろう。しばらく歩くと後ろからカンカンという足音が聞こえる。仕方ないので足を止めて階段に座る。

「やっぱり来たか。キリト」
　するとキリトは来るのは知っていたが隣にもう一人、
「んで何のよう？アスナさん。」
　さっきまでフードをかぶっていた女性プレイヤーのアスナがいた。
「エギルさんとキバオウの伝言伝えに来たの。後はそこの人と同じ。」
「ふーん。じゃあ聞くか。」
「エギルさんは、『二層ボス攻略も一緒にやろう。』ってキバオウは…『今日は助けてもろたけど、ジブンのことはやっぱり認められん。わいは、わいのやり方でクリアを目指す』だって。」
「了解。んじゃキリトは多分あの件だよな。」
「あぁ。」
　オレはアイテムウインドウから一つにアイテムをオブジェクト化する。
「何？」
「ギルド申請届けだよ。本当は3層からクエストクリアでしかとれないけどな。」
　オレは数項目を記載してＯＫボタンを押す。そしてキリトとアスナに申請届けを送る。
「これでいいか？」

「あぁ、充分だ。」
「えっとこのＯＫボタン押せばいいの？」
「オレの作ったギルドでよかったらな。まぁ後からアルゴも誘うつもりだけど。」
「その、ギルドって何？」
　アスナが訳がわからないように言う。
「もしかして、ゲーム初心者？」
「うん、そうだけど。」
　マジか。初心者でこの動きって
「……責任重大だな。」
「……何？」
「別に何でもないよ。えっとギルドっていうのは」
　オレは説明を始める。まぁおおざっぱだけど。
「ってこと。まぁオレも入ったことはないからよくわからないけど。」
「ふーん。つまり仲良しグループってこと？」
「仲良しグループってよりも手助けする仲間って感じだな。自然とパーティーはギルメンで組まされるし。」
「ふーん。」

とアスナが指を動かしてボタンを押す。ギルドメンバー欄にはキリト、そしてアスナの名前が書いてあった。
「それでこの後どうするの？」
「オレはアルゴをギルメンに誘いにいくけど…その後はたった一つのギルドルールを作ろうと思う。正直人は信用できる奴しか入れないつもりだから。」
「……？」
「何？」
「ギルドメンバー全員生きて現実に帰る。当たり前だけど一番難しいぞ。」
生きて帰る。それが一番難しいことを知っている。
「もし一人でも欠けたらダメだ。だからこのギルドの名前はこうしたんだよ。」
ギルド名ｇｕａｒｄｉａｎ
和訳すると守護者だ。
「自分のことだけじゃなくて、自分の仲間の命も守る。これさえ守ってくれたら別にいいさ。」
「あぁ、分かっている。」
「ええ、分かったわ。」
「なら次の階の攻略に行くか。アタック宜しく、キリト、アスナ。」

「そういえば私名乗ってないのにどこで知ったの？」
　オレとキリトが目あわせて笑う。
「今日はもう宿に行くか。流石に基本動作くらいは叩きこまないとな。あの町にうまい飯屋あるから食べながら話そうぜ。アクティベートはエギルがやってくれるだろうからな。」
「……なにかあったか？」
「ショートケーキの店だよ。あのショートケーキは晩飯になるだろうし別にいいだろう。正直ボス戦のお疲れ回みたいな感じで。」
「えっ。ショートケーキがあるの？」
　目をキラキラさせているアスナに苦笑する。そしてオレは先頭を歩き始める。
　まぁ少し高いが奢ってやるか。
　この世界でも笑える人が増えるように

黒いネコと守護者

「んで後どのくらいだ。キリト。」
「いや、もう大丈夫。」
　ＳＡＯが始まってから５ヶ月オレたちは攻略組トップギルドと言われるまでに成長していた。
　人数はたったのオレ、キリト、アスナ、アルゴ４人、
　希望者は何人もいたが審査の時点で外してきた。基本的にアスナ目当ての男性プレイヤーだから、どうしても断わる外ないのだ。
　しかし、一人一人にあだ名がついていて、レベル、スキル熟練度、プレイヤースキルに関してはほぼ完璧までと言われている。
　そして、オレがあるスキルをゲットしたことから余計に注目されるようになったのだ。
「んじゃ戻るか。そろそろアスナも買い物から帰ってくるだろうし。」
　とオレが町へ戻ろうとすると
「……バランスの悪いパーティーだな。」

「あぁ」
少し大きめのモンスターからパーティーが前からやってくる。盾といえるメイルが一人だけ。他は槍使い二人と棍使い一人そしてシーフ一人というパーティーだった。
「んじゃキリト、助けるか。」
オレは片手剣を抜く。
キリトも頷き片手剣を抜いた。
「助太刀しましょうか?」
リーダーだと思われる棍使いに声をかける。
「すいません。お願いします。やばそうだったらすぐ逃げていいですから。」
「キリトは殲滅、オレも殲滅でいいか?どうせ余裕だしな。」
「了解。」
「キリト?」
「んじゃ。メイルさんスイッチ」
オレはメイル使いの前になると片手剣ソードスキルホリゾンタル・スクエアを一体に放つ。オレの一撃でゴブリンは体力の半分を削り、キリトがとどめをさす。
そしてパーティーが全員回復する頃にはもう半分も残ってなかった。
そしてゴブリン隊は簡単に殲滅できオレは片手剣と盾をしまう。

「えっと、大丈夫ですか？」
　オレが声をかけると見知らぬパーティーは歓声を上げた。キリトは驚いていたがそれが普通だろう。
「とりあえずだけど死者はいないか？」
「はい。ありがとうございます。えっと。」
「ユニバースだ。そっちはキリト。」
　すると一人の顔色が変わる。
「もしかして、青い騎士と黒の剣士。なんで攻略組トップギルドのお二人がこんなところに。」
「まぁ、クエスト関係かな。そんな堅くならないでください。多分そっちの方が年上なんですから。」
　オレは苦笑してしまう。
「とりあえず、今日は終わりなら護衛しましょうか？」
「心配してくれて、どうもありがとう。それじゃ、お言葉に甘えて、出口まで護衛頼んでいいですか？」
「別にいいですよ。んじゃキリト、戻るか。」
　オレが先頭で戻ろうとすると誰かにこんこんと叩かれる。振り向くと紅一点の黒髪

の槍使いがいた。目には涙を滲ませながら何度も繰り返した。
「ありがとう……ほんとに、ありがとう。凄い怖かったから……助けにきてくれた時、ほんとに嬉しかった。ほんとにありがとう。」
「……」
涙目ながら話す少女。オレは初めて強くてよかったと思えた。
オレはアスナとアルゴに連絡して２０層に来るように伝えた。アスナは素直に来てくれた。
「アスナ、来たか。」
「ユニバース君どうしたの？」
「だからメッセージで言っただろう。クエストしている途中に助けたパーティーからお礼がしたいから言われたから素直に甘えることにしたんだよ。」
オレはアスナと歩く。
「それに珍しく女のプレイヤーがいたんだよ。流石に男ばっかりだからちょっと悪いわよ。」
「女性プレイヤーが居るの？」
「あぁ、アルゴに聞こうとしたんだけど今回は仕事入っているらしい。はぁ、これアスナが来てくれて本当によかったよ。」

オレは笑う。今一人でキリトに任せている。
そしてしばらく歩くと昔よく飯を食った店があった。
扉を開けると
「あっ、こっちです。」
思いっきり手を振るシーフの男性。
オレは苦笑して入っていくと飲み物とよくここで食べた料理が置かれていた。するとみんながドリンクを持ち
「えっと、それじゃ月夜の黒猫団に乾杯。」
「「乾杯」」
急に音頭をとられたので、あっけにとられてしまう。
「そして命の恩人、キリトさんとユニバースさんに乾杯」
オレたちを見つめる月夜の黒猫団のみんなに
「「か、乾杯」」
オレたちは曖昧に返すしかなかった。
そしてしばらくたって食事会が始まる。
しばらくオレとキリトはポカーンとしていたが月夜の黒猫団のリーダーのケイタが明るく話しかけてくる。

どうやらリーダーは棍使いのケイタ、シーフのダッカー、槍使いの男性はザザマル、槍使いの女性はサチ、盾職のテツオであることもわかった。
そしてオレはこのギルドはいいギルドだと思っていた。
「いいギルドだな。笑顔が耐えないし何よりも団結力がある。」
オレたち攻略組はソースの奪い合いでギクシャクしている。とくにオレたちはすごく楽しそうに見えていた。
「もともと同じ高校のパソコン部のメンバーなんだよね。」
「なるほどな。でも本当にいいギルドだと思うよ。攻略組はけっこう内部がギスギスしてるところも多いから。」
「あの、失礼ですがレベルって？」
「４８。」
するとキリトとアスナがびっくりしている。
「ちょっと、ユニバース君いつ上げたのよ。」
「夜中のちょっと前に生産スキルを使ったクエストをやっているんだよ。オレは一層の時から裁縫上げているからそれ関係だな。」
「あっそういえば４層の時地味に持っていたな。ってことはあの反復クエストか。」
「一応おかげで熟練度は５００越えてるぞ。」

「上げすぎだろう。」
　キリトがため息をつく。
「４８って」
「多分今だったらこの世界ではレベルは一番上だろうな。やることなさすぎるんだよ。」
「そんな余裕あるのはユニバース君だけだと思うけど。」
　アスナがため息をつく。
「まぁ最近はあの化け物みたいな奴に負けてそうだけどな。」
　オレはため息をつく。
　２５層のボス攻略戦でかなりの被害をオレたち攻略組は負わざるを得なかった。その中でオレたちのギルドはとある男とほぼ４人だけで２５層攻略ボスと戦うことになったのだ。
「何だよ。神聖剣って。あんなチート聞いたことないぞ。」
　オレは盾職だが布装備を着ている。キリトから言われて回避能力が高いから行動力が落ちる金属装備よりも布装備で戦った方がいいと言われたのだ。
「えっと、ユニバースさんそれって血盟騎士団のヒースクリフ団長のことですよね。」
「あぁ、ユニークスキル持ちのことだよ。」
　あの防御力はずば抜けている。正直なところうらやましいの一言だ。

あいつがいなかったらもしかしたら負けていた可能性もあった。
「まぁ、いいや。そういえば前衛は一人だけなのか？」
するとケイタが苦笑いして
「そうなんだよ。レベル的にはさっきのダンジョンくらいなら充分狩れるはずなんだよ。ただスキル構成がさ……ユニバースさんももう分かってると思うけど、前衛できるのはテツオだけでさ。どうしても回復がおっつかなくて、戦ってるうちにジリ貧になっちゃうんだよね。」
ケイタが言う通り盾職が一人のパーティー編成はかなり厳しいといえる。オレのパーティーはキリトもかなりの耐久力があるのでオレが盾、キリトが両方でアスナがアタッカーといえる。
「だから本当はもう一人入ってくれたらずいぶん楽になるんだけど、それに……おーい、サチ、ちょっと来てよ。」
ケイタが手を上げてアスナと話していた槍使いの女性プレイヤーだった。
「こいつ、見てのとおりメインスキルは両手用長槍なんだけど、もう一人の槍使いに比べてまだスキル値が低いんで、今のうちに盾持ち片手剣士に転向させようと思っているんだ。」
「やめた方がいい。」

　オレはケイタに向けて一言言う。
「正直なところ後衛から前衛に転向させようしたパーティーが壊滅したと言う事例があるんだよ。とくにサチさんはさっき見る限り性格は怖がりなんだろう。それなら後衛がギリギリだな。」
　実際自分が盾職だからこそ分かる特徴。サチには流石に盾職をやらせるのは酷だと思われる。
「サチさんはもう何度か、前衛やらせたことあるのか？」
「うん。でも後ろで敵をチクチク突っつく役だったんだけど、それが急に前に出て接近戦やれって言われても、おかっないよ。」
「……だろうな。オレも正直ヒヤヒヤすることがあるし仕方ないよ。」
　オレは盾職だから一番ＨＰが減る職でこの中でもイエローゲージまで落としたことがある。そのときのヒヤヒヤする感じはいつまで経っても消えなかった。
「……そっか。サチごめんな。」
「ううん。気にしないで。」
　オレは少し考えてから
「なぁ、ケイタたちは攻略組に来るつもりはないか？」
　するとキリトが反応する。

「おい、ユニバース、どういうことだ。」
「正直なところこんな下位層よりも最前線プレイヤーの方が安全だろう。レベル上げやすいしな。それに２５層攻略ボス戦で軍の奴らが撤退しただろう。だから少し攻略組が増えてくれるのはありがたいんだよ。それにオレたちもいつまでも風林火山のクラインを頼るばっかりじゃいけないだろうしな。」
「そうだね。でも大丈夫なの？」
　アスナの疑問は動きとかの問題だろう。
「さっき動き見ていたけど動きは良かった。ただ伸びないのは前衛が足りないせいだと思う。」
「でも、僕たちレベルが。」
「レベルならオレの装備が少し余っているから上げるから2ヶ月、いや1ヶ月くらいあれば攻略組と同じくらいまで上げられると思う。もちろんオレもレベル上げは手伝うさ。キリト、アスナはどう思う。」
「うーん。ユニバース君がいうんだったら別にいいんだけど。」
「オレも、流石にこのパーティーは危ないと思うしな。」
　どうやら信頼されているのかオレに賛同意見をくれる。
「まぁ、どうだろう？オレたちのパーティーに入ってくれないか？」

オレが言うとケイタたちは少し話し合う。そしてオレの方を見て
「じゃあ、お願いしてもいいかな。」
「あぁ、よろしく。」
オレとケイタが握手する。
これがオレたちと月夜の黒猫団との出会いだった。

生きる意味

月夜の黒猫団と出会い二週間、

オレがパーティーに入ったことで月夜の黒猫団はかなり動きがよくなった。槍使い二人の動きの攻撃力も過去のボスのラストアタックで落ちた槍を使うとかなり攻撃力が上がった。

オレは基本的に経験値ボーナスをもらわないように攻撃はせずに防御中心、防具のレベルを下げ戦闘時回復（バトルヒーリング）の熟練度を上げていた。

「今日はこれくらいで帰ろうか。サチとケイタが疲れてきてるし。」

オレは時間を見ると狩りを始めてから七時間が経っていた。今の階層は２８層、最前線から二層低い階層だった。

それだからこそオレはメンバーの様子を見て体調や疲れを見極めて帰るタイミングを見ていた。

レベルは順調に上がっているらしく、月夜の黒猫団のメンバーはステータスを見てかなり驚いている。オレもほとんど手を出してなかったがレベルが１レベル上がるほど順調だった。たぶんオレのスキルの影響もあるのだろう。一人を覗いたら

「サチ、大丈夫か？」
オレはずっと心配していたサチに声をかける。
「うん。大丈夫。」
これまでぶっ通しで狩りをしてレベル上げていたからだろうか。疲労の色が見えていた。
やっぱり男性プレイヤーと違って、女性プレイヤーは攻略組に向いていない。争いごとが苦手な奴が多いのだ。アスナはたぶんキリトに追いつこうとしているのだろう。一度アスナにギルド内で恋愛するのは禁止かと聞かれた時はかなり驚いた。もちろんオレはそんなルールはギルドにないと言ってからキリトにアタックしているらしい。
何か目標があって攻略組に入る人は多い。
そのほとんどがこの世界で最強剣士になりたいためである。
ほとんどの攻略組は効率のいい狩り場や宝箱、クエスト情報を公表していない。
攻略組と言う強さが支え最強剣士と言う生きがいを得ているのだろう。それをケイタに話した時、ケイタはオレに向かって聞いてきた。
……誰かを守るために攻略組に入りたいか
オレは苦笑してしまう。たぶんケイタが言っているのはギルドメンバーのことだろう。ケイタは月夜の黒猫団の中でも夜遅くまでオレに知識や情報を教えてほしいと聞

いてきた。
オレは隠すことなく知識や情報を教え続けた。正直ギルドのリーダー同士話がよく合うようになっていた。
そして一回の討伐の時に喜び、そして生きて帰る。
こういうギルドを目指しているオレにはまぶしかった。
町に戻るといつもの酒場に行く。そこにはキリトとアスナが戻ってきていた。
「お疲れ。攻略はどういう感じだ？」
「全くマッピングが進んでない。やっぱり軍が抜けてからはペースが落ちているな。」
「私達もクラインさんのパーティーと一緒に行動してるんだけど、未だに迷宮区までたどり着けてないわ。」
「うーん。やっぱりか。」
だいたい予想はできていた。
「あの、マッピングってそんなに時間かかる物なんですか？僕たちは無料でマッピングデータが配布されているんですけど。」
疑問に思ったのかケイタが言う。
「あぁ、最前線プレイヤーの奴らは基本的にマッピングデータを公表しないからな。オレがマッピングデータをアルゴから買って下層プレイヤーに公表しているやつだから

な。」
　マッピングデータを情報屋で買う。
　たったそれだけのことで資金が減っていくのだ。
「攻略組は基本的下に下がらないだろう。それは自分たちが攻略から遅れることが嫌なんだよ。おかげで情報を抑えることが多い。最近じゃあ下層プレイヤーに軍の奴らから狩り場まで規制をかけているらしい。」
　オレはため息をつく。
「おかげさまでギルドハウスも建てられないから大変なんだよ。普通は攻略組が下層プレイヤーを助けていかないといけないのにな。」
　下層プレイヤーや職人プレイヤーに感謝しないといけないのに、今や支えてくれるのが当たり前みたいに威張っている。そんな奴らを見ると本当にイラついてくる。
「ユニバース、それくらいにな。」
「あぁ、悪い取り乱した。」
　オレはちょうど出てきたドリンクを煽る。アオリンゴに似た爽やかな味が喉を潤した。
「それで、レベル上げは順調なの？」
「あぁ、一応順調だと思う。レベルは教えてもらったけどもう攻略組をレベル制限には

追いつけるくらいな。だけど疲れがちょっと見始めているイメージがあるから明日は休んだ方が良さそうだな。」

　するとケイタたちは少し驚いたようにしている。

「ふーん。なら私たちも休もうか。キリトくん。」

　手を伸ばして背伸びをするアスナ。

「えっ。でもマッピングが。」

「キリトくん。最近私たちも休んでないし、ちょっと休んだ方がいいと思うの。なんだか焦っているような気がする。」

　するとキリトもハッとしたようにして少し考える。そして

「そうだな。じゃあ、オレも休んでいいか？」

「あぁ、別にいいぞ。少しくらい気分転換してこい。どうせオレも休むつもりだし。久しぶりに下層の飯屋でも回ろうかな。」

「じゃあ、キリトくん明日買い物に付き合ってよ。」

「えっと、」

「おい、流石に後からにしろ。」

　オレはアスナに苦笑してしまう。最初は攻略のことでいっぱいいっぱいだったのがいつの間にか明るくなった。キリトも自然と笑う機会は多くなっているし何よりもま

だ生きている。
「ということでオレたちは休むつもりだけど、そっちはどうする？」
「そういえば、レベル上げに夢中だったし、オレたちも休もうか。」
すると月夜の黒猫団からも歓声が聞こえる。
久しぶりの休みってことで喜んでいる。
ただサチだけを除いたら。
その夜、ケイタからメッセージが届いた。
サチがいなくなった。
簡潔な文なだけオレは焦る。それはケイタ達も同じだったらしく迷宮区に探しに行くと言い出したのだ。
だけどオレは冷静だった。
「オレが追跡スキルを持っているから探してくるよ。サチのレベル的に一人じゃ迷宮区には行けないし、ちょっと会いに行ってくる。ケイタ達は部屋に待っていてくれないか？」
オレが追跡スキルを持っていることはメンバーに伝えていた。それを言うとハッとしたようにオレを見る。オレはサチの部屋で追跡スキルを使い薄緑色の足跡を追う。すると主街区の外れにある水路の中に反応があった。

オレは隠蔽スキルは持っていないので素直に入るとカツンカツンと足音がなる。するとその音に反応したのか座っている少女が目に入った。
「……よう。隣座っていいか？」
声をかけると、びっくりしたように呟いた。
「ユニバース……どうしてこんな場所がわかったの？」
「スキルでサチを探しにきた。他のみんなは今は宿屋で待機するように言ってある。」
オレはサチの隣に座る。互いに無言のまま時間だけが経過する。
「ねぇ。ユニバース。一緒にどっか逃げよ」
オレはサチと言う少女を理解してなかった。
「それって、この世界からってことか」
「……うん。月夜の黒猫団のみんなから、モンスターから、ＳＡＯから」
オレは少し考える。
「…オレだって逃げたいな。この世界から。」
オレはサチの気持ちが分かった。オレは１０層に到達したあと三回赤のゲージまで体力が落ちた。その時の恐怖はかなり厳しかった。
「…でも、キリトとアスナ。そしてサチ達を守らなくちゃいけないから。」
オレはだからこそ、サチの言葉を断った。

「……ごめん。意地悪なこといっちゃったね。」
「意地悪なんかじゃない。オレだって本心は逃げたいんだから。」
　オレだって本心は逃げたいに決まっていた。だけど、オレについてきてくれたキリトとアスナ、アルゴそして、月夜の黒猫団のみんなを裏切りたくなかった。
「…私、死ぬの怖い。怖くて、この頃あんまり眠れないの。」
　サチはポツリと呟いた。
「…ねぇ、何でこんなことになっちゃたの、なんでこのゲームの中から出られないの？　本当に死ななきゃいけないの？　あの茅場って人の言っている事は本当なの？……こんな事に何の意味があるの……？」
「オレもわからないな。」
　オレはサチの望むべき答えを答えられなかった。
「たぶん、誰も本当の理由はわからない。だから、理由を聞きたくてずっと攻略組にいる人もいると思う。」
　オレの予想はたぶん外れているだろう。でも、オレがサチにいえる一言だった。
「でも、オレにとってはこの世界にとらわれた意味はあったと思ってる。」
　オレはサチの方を見て
「リアルじゃオレは天涯孤独の身なんだよ。」

「えっ？」
マナー違反だけどオレはリアルのことを話し始めた。
「両親は離婚、そして母方に引き取られたんだけど母さんは事故で死んだ。んでしばらくはじいさんと婆さんの家にお世話になっていたんだよ。でも結局末期の癌で二人とも死んじゃってオレはずっと施設で暮らしていたんだよ。」
オレはため息をつく。
「んでいつの間にか学校にも行かなくなって、ゲームや昔から習っていた剣道にばっかりのめり込んだ。んで去年の夏に初めて剣道で全国一位になった。だけど、オレのことを喜んでくれる人はなかったんだ。」
オレが頂点に立ったときオレは初めてリアルの孤独なことを知った。友達や部活仲間がいる。準優勝者に試合に勝って勝負に負けたような。いや、絶対そうだったのだろう。
「ずっと友達も家族もいない。そんな中で、茅場晶彦からオレはこのゲームを貰った。」
サチがオレの方を見る。茅場晶彦に現実世界で会っていたと言うことはだれにも話していなかった。
「多分、茅場晶彦の目的にオレも含んでいるんだろう。多分このスキルもな。」
オレはステータスを可視モードにしてサチに見せる。基本的に最前線のスキルばっ

かりだが一番下の文字を指指す。
「エクストラスキル、急成長。ステータスの伸び幅、パーティーメンバーの経験値の増加、そして全スキルの熟練度の上昇効率アップ。」
「……それって私たちのレベルやスキルの熟練度の効率がよかったのは。」
「全部オレのスキルのせいだよ。２５層のボス攻略時から急に現れたスキル。たぶんラストアタックボーナスだったんだろうな。」
　普通だったら二週間で狩り場を８つ上げることはそうそうできない。
「んでオレはこのスキルを使って攻略組を増やそうとしたんだ。アスナとキリトも賛同してくれて、だけど他の大型ギルドに邪魔された。最前線プレイヤーのレベルを上げることが優先だろうって言うくだらない理由でな。」
　オレはＫｏＢの副団長の男と聖竜連合連中に止められた時のことを思い出す。
「オレはその時に生きている意味を考えた。攻略も何もかもおろそかにしてな。飲まず食わずでいつの間にか二週間が経っていた。その間ずっと支えてくれたのがあいつらだ。」
　キリトとアスナはずっとこもりぱなしのオレの世話をしてくれた。あの後もオレをギルドリーダーとして、そして一人の仲間としてずっと支えてくれた。
「なんか、オレにとって初めて生きているって実感したんだよ。心配されることなんて

初めてだったから。だからこの世界でオレはずっとあいつらを守る。こんなオレを心配してくれたんだからな。」

オレは苦笑する。

「月夜の黒猫団はオレが守るさ。オレの前にいる限りはな。だからサチは死なない。絶対死なせはしないさ。キミのことはオレが守る。」

オレはサチの頭を撫でる。

「サチは死なない。オレが守るさ。」

「……ほんとに？ほんとに私は死なずに済むの？いつか現実に戻れるの？」

「あぁ。でも我慢はするなよ。いつでも気分転換に付き合ったりや不安は聞いてやるしな。」

するとサチがにじり寄り、オレの左肩に寄り添い、少しだけ泣いた。

日常、そして暗転

オレはサチが泣きやむまでずっと側に座っていた。
泣きやむことには、夜中の１１時をまわり日が変わる前だった。
オレはケイタにメッセージを送り、サチは３日間の狩りの休暇をとることになった。そしてサチを寝室に休ませて、オレの全ステータスとレベル、スキル情報をキリト、アスナ、ケイタに公開した。
アスナとキリトはエクストラスキルの情報を知っていたとはいえその効果に驚いていた。
ケイタはただ驚いていたが、サチの状態を聞いてきた。オレはサチがオレに狩りの前衛を任せたことで攻略の邪魔をしていると思い込んでしまったという嘘をついた。サチからの希望だったのでオレは嘘をついたのだ。
結局全部終わったころには日付が回っていた。
オレが宿屋の部屋に向かうと少女がオレの部屋の前で立っていた。
「サチ、どうした？」
オレが後ろから話しかけると

「えっと、ちょっと眠れなくて。」
水路のことを思い出す。怖くて最近眠れないと言っていた。多分今日もそうなんだろう。
オレはドアを開ける。
「んじゃ入るか？飲み物くらいしか出せないけど。」
「うん。」
オレは部屋の扉を開けて灯りをつけアイテムウィンドウをいつもサチが飲んでいるドリンクをオブジェクト化して
無言でサチは受け取りベットに座り込む。オレも一つ持って備え付けのソファーに座る。
「……ねぇ。ユニバース。」
「なんだ？」
「…私、死なないよね。」
「君は死なない。死なせはしない。」
オレはサチの隣に座る。
「…大丈夫。オレがキミたちを守るから。」
「うん。」

オレにもたれかかってくる。そしてしばらくたった後スースーと寝息が聞こえてきた。どうやら眠ってしまったらしい。

オレはケイタ達にメッセージを送りアイテムウィンドウから寝袋を取り出す。寝てしまったものは仕方ないのでオレは床で寝よう。そして一番の問題は

……明日なんてケイタ達に説明しよう。

翌日、オレがアラームの音と共に起きるといい匂いがした。そしてほのかに温かく、心地よい。

目を開けると視界がぼやけている。

「あっ。起きた?」

オレの目の前から声が聞こえるが寝ぼけていて視界がはっきりしない。オレは寝ぼけ眼をこすり身体を伸ばす。そして視界がはっきりしてくる。オレの目の前にいたのは、

「おはよう。ユニバース。」

サチがオレの目の前にいた。

「……おはよう。」

オレは今の現状を確認する。昨日サチがオレの部屋で寝たことは覚えている。だけどなんでオレは今膝枕されているんだろう。

サチは昨日よりも顔色がよくなっていた。寝不足が少しは解消されたのであろう。というか

……気づかなかったけどこいつ凄くかわいかったんだな。

顔色がよくなっていたのと初めて近くでサチの顔を見たからだろう。不覚にも少しドキッとしてしまう。

するとクスクスとサチが笑いだす。

「なんかユニバースっていつもは頼りになるのに、寝顔は凄く子供っぽいよね。」

「……それほめてないだろう。」

オレはとりあえず寝袋から出てソファーに腰をかける。「いつから起きていたんだ？」

「6時くらいかな？」

「……早いな。眠れなかったのか？」

「ううん。目が覚めちゃっただけだから。」

下を向いているところを見ると嘘をついていたことはすぐに分かった。だけどオレは何も言わずに立ち上がる。

「そろそろ朝食だし下りるぞ。」

「うん。そうだね。ケイタ達に謝らないと。」

「あぁ、ちゃんと謝っとけよ。心配してたからな。」
「むぅ。分かっているよ。」
　オレもこの状況がバレたら十分まずいけどな。
　でも多分当分の間、サチは誰かがいないと寝れないだろう。
「……サチ、アスナと部屋共同にしてもらうか？」
「えっ？」
「今回はオレの部屋に来たけどさすがに男子の部屋で寝るのは不安だろう。」
「……ユニバースがいい。」
「だから、ってえっ？」
　いじけながらサチが怯えながら
「だからユニバースの部屋がいい。」
「……」
　オレは少し考える。そして
「……もしかしてお前。いや。なんでもない。」
　もしかして、サチオレが近くでいないと寝れないのか。なんて言える訳がなかった。
「……んじゃ飯食いに行くか。」
「うん。そうだね。」

オレとサチは下の食堂に向かった。

結局サチは狩りの時間は弱音も吐かずずっとついてきた。ケイタ達の腕も上がり狩りの効率も上がった。レベルもスキルの熟練度も上がりつづけているらしい。この調子だったら後一週間で最前線まで上がれるはずだった。

前と二つだけ違うところある。一つ目はサチがあれから毎日オレの部屋で寝るようになったことだ。

君は死なないとオレが言うとどうにか寝られると言っていたのであれからもずっとオレの部屋で寝ていた。

そして2つ目はサチとの共通ウインドウを作ったことだ。理由を聞くとポーション類の受け渡しが楽だからと言っていた。オレは別に良かったのでサチだけの共有タブを承認した。

そしてちょうど月夜の黒猫団と出会って1ヶ月だったある日キリトとアスナがボス部屋を見つけたからボス攻略戦に参加して欲しいと連絡があった。

オレはもともとリーダー格だったため参加しないといけなかったことは確実だった。

そしてそのことを月夜の黒猫団に告げるとケイタも了承した。そしてケイタ達もサプライズを用意していたのだ。

共有ギルドハウスの設立。

月夜の黒猫団がオレ達にお礼がしたいと言って計画していたらしく、オレ達はかなり嬉しかったものだった。
ここまでがオレがまともであった時の話だ。
あれから半年か……
オレは幸せだったときのことを思いだしていた。
オレは映像記憶用結晶を見ていた。ボス攻略戦前に撮った最後の映像だ。
何度も何度もこの結晶を見て泣き、これを見て自分の罪を責めた。
後一週間でクリスマス。
サチたちは元気だろうか。
オレは昔のギルドメンバーとパーティーメンバーのことを思いだす。
キリト、アスナ、アルゴ、サチ、ケイタ
オレは泣きそうになる。だけどそんな暇はない。
オレは今日もアリの巣に向かう。
死んだ３人の蘇生をするために。

クリスマスボス

「はぁ……はぁ…」

オレはずっと４６層のアリ谷でレベル上げをしていた。疲労も眠気もピークをすぎ体の感覚がない。ＨＰがもう一週間も寝ていない。攻略にも参加せずにただレベル上げをしていた。

一区切りついたので上に戻る。そしてウインドウからポーションを飲み込む。しかし味なんてあのときから何も感覚にない。ついでに市販で売っている疲労回復のドリンクを飲む。

しかし味もしないし効果も少ない。しかしそれも今日までだ。明日はクリスマスイブ。恋人同士はいや、ほとんどのプレイヤーにとって休みの日となるだろう。

気にせずに転移結晶を取り出して

「転移、ミーシェ。」

オレは第３５層主街区へと飛んだ。

最前線は４９層なのでそこにはオレを知っているやつは誰もいないはずだったのに。そこにはあいかわらず黒のコートを着ている男の姿だった。

オレは気づいていながらその横を通り過ぎる。
「ユニバース。お前まだあのときのこと引きずっているのか。」
キリトの声が聞こえる。
しかしオレは何も頷きも反応もできなかった。ただ宿屋に向かって歩き続ける。
キリトがオレのクエストイベの情報をアルゴに買ったと言う情報を買ったのでオレの目的は知っているはずだ。
そしてたぶんそのことも知っているのであろう。キリトが悲しそうな顔をしていた。
「……伝言だ。明日サチが伝えたいことがあるって言っていたぞ。場所はサチが昔隠れていた場所らしい。」
「あぁ。分かった。」
オレは頷く。すると驚いたようにこっちを見る。
「…それで何時だ。」
「えっと、夜の7時って。」
「サチに伝えておいてくれないか？明後日にしてくれって。」
オレはそういって歩きだす。
「ユニバース。お前ももう分かっているんだろ。その蘇生アイテムはガセ情報ってことを。」

「あぁ。でも少しでも可能性がある限りやりたいんだよ。あの時オレが２７層について説明しとけば、あの３人は死なないですんだんだよ。」

ダッカー、ザザマル、テツオの３人はオレ達がボス攻略戦を行っている最中に死んだらしい。

階層は第２７層、オレ達がケイタと話し合って２７層はトラップ多発地帯であることからレベル上げには月夜の黒猫団は使わないと決めていたのが原因だった。

オレがボス攻略戦が死人も出ずに終わり、ケイタとサチにメッセージを送ろうとしたやさきだった。

ダッカー、サザマル、テツオの文字が回線不能、つまりこの世界でＨＰが０になり現実世界の３人が死んだことを指していた。

オレはその文字を見た瞬間崩れ落ちたらしい。キリトとアスナに支えられオレは宿屋に戻った。するとサチがオレの方に駆け寄ってきた。サチ曰わく買い物に行っていたらしく３人に留守を任せていたらしい。だから自分の部屋に戻ったのだと思っていたらしいが、オレはここで一番残酷なことをサチにさせてしまった。

始まりの街の黒鉄宮で３人が生きているか確認してきてほしいと。

するとアスナもキリトもサチも慌てたようにフレンドリストを見てしまう。すると数分見ていたが全員が無言を貫いた。サチが一番つらかったのだろう。ケイタが戻っ

てくる前には全員が泣いていた。
ケイタは強いやつだった。オレ達が生きていたこと。それだけが良かったと言っていた。
しかしオレはその言葉が入ってこなかった。
オレが殺した。
たった3つの命さえ守ることができなかった。
その事実がオレを苦しめた。
そこからオレは強さに執着するようになった。
ギルドはケイタに任せて経験値効率のいいソロプレイヤーに移転して、金を防具や武具にかけて、たった一人で全ての階層の攻略に専念していた。いや、ただ強さを求めていただけだろう。
周りからは青い騎士と言われなくなり、落ちた騎士やレベルバカと言われるようになった。呼ばれることは当たり前だった。
元ギルドメンバーやケイタやサチが心配してくれたがオレはそれを拒絶した。ボス攻略戦も別のパーティーに入り、終わっても次の階層の攻略にすぐ進んだので話すこともなくなり関わりはなくなっていた。
そしてクリスマス10日前のいつも通りクエストをしていたらある情報を手に入れ

る。

ニコラスの大袋の中には、命尽きた者の魂を呼び戻す神器さえもが隠されている。

ニコラスとはクリスマス専用ボスの名前だ。

絶望な状況にたった一つだけの希望。

ずっと死に場を探してきたオレにとっての、唯一の希望だった。それがニセモノだとしても。

「……これが終わったらサチのところでもどこにでも行くさ。」

オレはキリトの方を向かずに一言言う。キリトが今どんな顔をしているのかみたくもなかった。

オレは宿屋に向かって歩きだす。もしも本当に生き返るとしたらオレはどんな批判でも受け付けるだろう。

そして宿屋に入りアラームを設定してすぐに眠る。

もしも無駄になっても最高のコンディションで挑みたかった。

そしてそれはすぐに叩き起こされる。

久しぶりに寝たからであろうか、頭痛が響きめまいもしている。

オレはウインドウを開く。武器、盾、防具をとっておきのやつにしてポーション、結晶アイテムもありったけウインドウの中にぶち込んだ。

そして最後の一つ、回廊結晶を握りしめオレは迷いの森に設定する。
そして宿屋の中に開き歩き始める。そしてマップを開き歩き始めた。
迷いの森の一角にでかい木があるとその時攻略したオレはどうにも思っていなかったがこのクエストボスの情報の出現場所になっていることになっていたのは予測できた。
オレは地図を見ながら走り出す。キリトもたぶん気がついているはずだ。オレがソロで倒すにはあいつらより先につかないといけない。もし止めようとするならたぶん戦闘になる。あいつらを殺したくはない。
しかし、その望みは叶わなかった。
オレがモミの木の前には約３０人以上のプレイヤーがいた。いや、オレを待っていたと言うべきか。
先頭にはキリト、後ろにはケイタとアスナがいた。その後ろにはクライン達の風林火山、エギルなどの多くの攻略組プレイヤーが後ろについている。意外だったのはＫｏＢ団長のヒースクリフまでいたことだ。
「よう。ユニバース。」
…オレはキリトの姿を見てすぐに舌打ちしてしまう。
「……やっぱり止めるのはお前かよ。」

オレは片手剣を抜く。するとキリトの後ろからざわめきが起こる。
「オレを止めようってしても無駄だぜ。死ぬまで戦う。これがオレの最後になろうともな。」
片手剣は第４５層のラストアタックで手に入れた剣で一度も失敗せずに最大強化まで済ませてある。
「ユニバースくん。あきらめてくれないの？」
「……あぁ。」
アスナの声も何も感じなくなっていた。こうしている時も時間がなくなってきている。
「……オレはそれだけの罪を重ねてきたんだ。だからオレが死んでも、これ以上の罪を重ねても。オレはこのクエストボスを倒す。それを邪魔するやつは誰が誰でも殺す。」
もう頭痛も痛覚も何も感じなくなっていた。
ただこいつらを殺す。
やりたくなかったけど、仕方ない。これがオレの最期だとしても。
「な、なんでだよ。お前にも、心配してくれるやつはいるだろう。」
後ろにいる誰かが叫ぶ。
「お前は見たところ高校生くらいだろう。お前が死んだら両親とか悲しむじゃ。」

「いないさ。そんな奴。」
「そんなの分からないじゃないか。なんでそんなことを。」
「オレには、両親も、誰もいないからだよ。」
　すると全員が黙りきってしまう。
「オレは父さんは離婚で出ていって、母さんは事故にあって死んだ。最後の家族のじいちゃんばあちゃんもガンで死んださ。」
　すると全員が目を伏せる。
「分かるかよ。帰る場所がないって。このゲームに巻き込まれても心配してくれる人は誰もいないだぞ。帰る場所や心配してくれる人がいるならまだいいさ。オレにとったらこのゲームが終わったら生きていられるのかも危ないんだよ。」
　オレは片手剣を構える。
「御託は終わりだ。さっさと終わらせる。」
　オレが戦闘体制をとる。集中力は切らさずただ突破することだけを考える。
　オレが心拍を整えそして突撃しようとしたそのとき、
　後ろからもう一つの大軍が現れた。こっちも総勢３０人くらいいるパーティーだった。
　青い鎧から聖竜連合とだと分かる。

くそったれ完璧に油断していた。つけられてたのかよ。
隠蔽スキルをとっていないのが仇になった。オレにはもうすべきことがない。
もう全て殺してしまおうか。
そんなことを考える。しかし
「ユニバースくん。ここは我々が食い止める。君は行ってボスを倒してくれ。」
そんな声が聞こえた。オレは動こうか迷ったがその言葉を信じて走り始める。
他の誰もオレを止めようとはせずに道を空ける。
最後のワープポイントをくぐり抜け次のエリアと向かう。
最後エリアに入りオレは頭痛が酷くなってくる。
早めに倒さないといや死んでしまってもかまわない。
目の前に赤と白の上着に同色の三角帽子、そして右手に斧を持ったモンスターが出てくる。
「殺す。」
オレは思いっきり雪を蹴った。
どのくらい経ったのだろうか、
最後のソードスキル《ヴォーパルストライク》を放つとニコラスはポリゴン片となり消える。

オレはそれを確認した後によろよろになりながら剣をしまう。達成感も何もなくオレはウインドウを開く。アイテムウインドウを見ると多額のコル、そして武器や防具がドロップしていたがオレは目当てのアイテムを探す。そしてそれはすぐに見つかった。

《還魂の聖晶石》

オレはこのアイテムをすぐにオブジェクト化する。そしてワンクリックして効果を確かめる

《このアイテムを手に持ち、「蘇生、○○（プレイヤー名）」と言えば、ＨＰがゼロになった対象プレイヤー（約十秒以内）を蘇生します》

オレはこの文字を見た瞬間崩れ落ちた。

分かっていた。この世界で本当にＨＰがなくなったら死ぬことを。

オレはそれでも目を背けていた。しかし目の前に書かれてあることは現実だ。現実からはもう目を逸らすことはできない。

オレは蘇生アイテムをアイテムウインドウにしまう。

オレは帰るために立ち上がろうとするが、急に頭痛が立ち上がれないくらいの痛みに襲われる。鈍器で後ろから殴られたような動きに耐えきれなくなる。

オレは視界が暗転していった。

帰るべき場所

目が覚めると知らない場所だった。
あれだけずっと頭が痛かったのに楽になり、身体が少しだけ軽くなっていた。
ウインドウを開くと２０２３年１２月２４日６時００分と書かれていた。
そこで気付いた。
あぁ。生き残ってしまったんだなと。
オレは立ち上がり、ため息をつく。そして入れておいた転移結晶をオブジェクト化して一言
「転移　タフト」
オレは転移結晶を使い、１１層主街区にとんだ。
オレは重い身体を引きずって、水路へと向かう。
昨日のニコラス戦、オレと、キリトが対面したときあの集団の中にサチがいなかった。
オレはキリトに向かってこれが終わったらサチに会いに行くって言っちゃったしな。
あそこにいたらサチとの約束が守れないしオレが会いにいくにはこの手しかなかった。

そしてオレはサチがあそこでずっと待っていると感づいていた。なぜだか分からないがオレは待っていると予測をたてていた。
懐かしいな。
オレはこの階層にくるのはもう何ヶ月ぶりだろうか。下位層プレイヤーが多くいる中オレはこの階層を歩く。
そしてオレは目的の場所にたどり着いた。
しかしそこには誰もいなかった。
昼間でも真っ暗だったそこには誰もいなかった。
オレは誰もいないところに座る。
今の時刻を確認すると６時３０分。
とりあえずフレンドリストを操作する。
キリト、アスナ、アルゴ、ケイタ、サチ、エギル、クライン全員が生きていた。
とりあえず安堵の息を一度つく。
オレはただ何もせずに待っている。オレは未遂とはいえ攻略組プレイヤーを殺そうとした人間だ。
よくて攻略組の追放、悪くて黒鉄宮送りだろう。
だからその前にサチとケイタにはあっておきたかった。

最後に本当の気持ちを知りたかった。
ケイタとサチはオレの本当の気持ちを。
オレがあのパーティーに介入しなかったらダッカー、ザザマル、テツオは死ななくてよかったはずだ。
どんだけの怨みを抱えているのか分からない。だからあいつらに殺されるなら本望だった。
上からはクリスマスなのでカップル連れが歩いている。
孤独がオレの身を襲う。
そういえば、オレが最後にサチと話したのはいつだったかな？
ずっとサチが隣にいた時を思い出す。
最初にあった時はすごく臆病な印象だった。
冒険している時も臆病で、しかも泣き虫で、怖がりで
でも、どこか強くて、暖かい。
そういえば、別れる前は寝るときオレに抱きついてきてたよな。
あのメンバーで一番思い出があるのはサチだった。ずっとメンバーだったキリトやアスナよりも思い出に残っている。あの時一番近くで、一番一緒にいたからだろうか。
そういえば、なんでサチはあのタイミングで共有タグの設定なんかしたんだろう。

オレは少しアイテムウインドウを操作する。するとまだサチとの共有タグが残っていた。
オレは操作し一つずつアイテムを見ていく。
ほとんどポーションや回復結晶ばっかりだった。どうやら最近も使っているのか。最近ショップで売り出されたアイテムまでしまってあった。
その一つを取り出し一本を飲む。
レモンジュースに苦味のある味がしている。容器を放り投げる。
そしてカンカンという足音が聞こえこっちに歩いてくる。
そしてオレの前でそれは止まった。
「なんでここにいるの?そんなカッコで寒いでしょう。」
半年ぶりの声が聞こえる。そしてオレは苦笑してしまう。
「お前が呼んでおいて、その反応はないだろう。」
「みんな探していたよ。急にギルドハウスからいなくなったから。」
「前にお前も同じことしてただろ。」
オレはあの時のことを思い出す。
「ギルドのみんなに心配かけて、まぁオレのはたちが悪いけどな。」
半年も音信不通で最後はキリト達にも剣を向けたんだ。

「まあ、言いたいことは沢山あると思うけど、それはじっくり聞くから、一言だけいいか？」

すると、サチははじめてあった時のように目を涙を貯めたようにして頷いた。

「久しぶり、サチ。」

オレが言うとサチはオレに抱きつき泣き出した。

「バカ、ユニバースのバカ。」

サチの一言、一言に重みを感じる。

冷たかった心に暖かいものを感じた。ふんわりじわじわと曖昧にだか、確かにその暖かさは消えなかった。

涙がオレに当たるたび罪悪感にかられる。

オレはこんなことはじめてだったので何もできないままだった。

ただ罵倒されているのにうれしくて、泣かせてしまったことに後悔してそして、すごく泣きたくなってきた。

「ゴメン。」

オレはサチの体を抱きしめた。

「ゴメン。」

目から涙が出てくる。

泣くなんて何年振りだろうか。ばあちゃんが亡くなっていらいだから十年振りくらいだろう。たった一人でいてもしんどくてもつらくても泣けなかった。

「ゴメン、守るって約束したのに。ダッカーをザザマルをテツオをみんなを死なせてしまった。」

オレはサチを力いっぱい抱きしめる。たぶんハラスメントコードがサチには発動してると思うが気にしなかった。

「つらかったのはキミなのにオレは自分のことでせいいっぱいで。」

吐き気や嗚咽が漏れる。

「それで、オレは」

「いいの。」

サチは泣きながらオレに軽く、お姉さんらしく言う。普段のサチとは全然印象が違った。

「私はキミが生きていたらそれだけで。」

その一言でオレはすべてが報われたような気がした。オレは泣きながらサチに泣きつくた。何十分いや何時間泣いただろうか。久しぶりに流した涙は苦しくてどこか心地よいものだった。

オレとサチしばらく二人で他愛のない話をした後オレは思い出したくないことを思

い出してしまう。
「そういえばオレ部屋から転移結晶で脱出したから今ごろ大騒ぎになっていると思う。」
オレがそう言うとサチにかなり怒られるはめになった。するとため息をつきメッセージを送ってからサチが歩きだした。
オレはその後についていく。
すると転移ゲートで19層、ラーベルグに転移する。
確かかなりの地価が安いことで有名でゴーストタウン街全体はゴーストタウンだったはずだった。
しばらく歩くと三人の人影が見えてくる。
黒の人影と白と赤の服を着た細剣使い、そして、オレがキリト達を託した棍使いが立っていた。
「っ!!」
オレは竦んでしまう。今すぐ逃げ出したくなった。
「大丈夫だよ。」
サチはぎゅっと手を握ってくる。
「大丈夫だから。」
オレは握り返される手に包まれる。オレはそれに押され少しずつだか近づく。

「ユニバース。お前サチに会いにいけとは言ったけど、まさか転移結晶を使ってまで抜け出すとは思わなかったぞ。」
「約束したから仕方ねぇだろう。」
「全く、心配したんだよ。」
「心配してくれていたのか？」
「あたりまえでしょう。」
「アスナ落ち着いて。ユニバースはそ、その」
「悪い。心配してくれる人があっちにはいなかったから、慣れてないんだよ。」
「あっ。ご、ごめんなさい。」
　素直に謝るアスナに苦笑してしまう。
「いいよ。オレの方がひどいことしてたし。今更言っても遅いけど気が動転してたとはいえ、今まで避けていて、そして剣を向けてゴメン。後、ダッカーをザザマルをテツオをみんなを死なせてしまってゴメン。」
　頭を下げる。
「ユニバースさん。」
　ケイタがオレの肩を叩く。
「謝るのはこっちの方です。僕らが攻略組プレイヤーの事を甘く見ていたのが元々の原

因なんです。」
「でも、」
「それに僕にも原因があるから。」
　ケイタがオレの方を見る。
「それに、僕はサチが生きていただけでも。それだったら。」
　ケイタがサチのことを押し出し
「こいつのことよろしくお願いします。こいつのことを一番分かっているのはたぶん君だと思うから。」
　ケイタが照れくさそうにサチを前に出す。
「ちょっとケイタ。」
「あぁ、任された。」
　オレは笑って答える。
「ちょっとユニバースも。」
「そのかわり、ケイタも生きろよ。そうしないとこいつの一生のトラウマになりかねないぞ。」
「あぁ、僕もザザマルたちの分も生きるさ。」
「まぁ、オレの処分が決められてからになると思うけどな。」

　ため息をつく。
「そのことならヒースクリフから伝言もらっているわ。半年間の休養ですって。」
「休養？謹慎じゃなくて？」
「あぁ、落ち着いたら戦線に復帰してほしいって言っていた。多分この後はキミがいないと攻略が困難になるだろうってな。多分精神的にも、肉体的にも疲れていてあのちゃんとした行動ができなかったって思われているらしいぜ。」
「多分前者が本音だろうな。まぁ復帰するかは半年後決めるよ。さすがに疲れた。」
　オレはもう当分の間は狩りをしたくなかった。多分これ以上狩りに出てたら、死ぬ可能性が高かった。
　さすがに心配してくれる人がいるのなら死にたくはない。生きて現実世界で笑ってオフ会をしたかった。
「ケイタ、後半年最前線頼めるか。オレは２２層のログハウスでも買ってゆっくり休むから。後敬語もいい。前にも言ったけどオレの方が年下だし。」
「分かった。でも、サチはどうすんですか？」
「それはサチが決めることだろ。オレがどうこう言える立場じゃねぇよ。」
　ため息をつく。
「……キリト、アスナ、ケイタ、私ユニバースについて行っていい？」

サチが遠慮がちに言う。するとみんなが頷いた。
「うん。もちろん。サチさんずっとユニバース君を心配してたんだし。」
「アスナもだけどな。」
「キリト君もでしょう。」
ワイワイ話している。オレは何も変わってないと思った。
「ユニバース。これ。」
サチから送られたのはギルド申請届けだった。オレは承認ボタンを押しギルド欄に久しぶりにオレの名前が載る。懐かしい気持ちでいっぱいだった。
「おかえり。ユニバース君。」
アスナ、キリト、ケイタ、サチがこっちを見る。
オレが今帰るべき場所。
ずっとオレが求めていたことがそこにはあった。
「あぁ、ただいまみんな。」

サチの願い

ギルドハウスに入った日にクリスマスパーティーを開いた。
そこにはクラインや、エギルなどの小規模ギルドのメンバーが多く出席しており、オレは剣を向けた人に謝りに回ることになった。
そしてなぜかヒースクリフも自分のギルドが主催しているクリスマスパーティーに参加せずにこっちに参加していたのが驚いたが。
食事は、アスナとサチが作ったらしく大好評だった。サチは最近は狩りにはほとんどでていないらしく、オレがギルドから抜けている間、オレが昔やっていた下位層の支援をずっとしていたらしい。
マップデータやモンスター情報など多くの情報を攻略組やキリト達から聞いたのであろう。サチは攻略組の中では有名だった。
そのかわりレベルはマージンがとれていないのでここからはギルドの事務仕事をしていくらしい。
でもあれからサチのことで少し変わったことがあった。
サチのことが直視できないのだ。

サチを見ると恥ずかしくなってきて目を背けてしまう。でもサチと一緒にいると楽しくて、幸せな気持ちになるし、サチが他の奴と話しているとモヤモヤする。

エギルに相談すると、答えはすぐに返ってきた。

お前サチのことが好きなんじゃないのか？

オレは少し考える。確かにサチのことは友達としては好きだけど、そういう風には意識してきたことはなかった。それにずっと気になってきたことがある。

今のオレとサチの関係ってどんな関係なんだ。

クリスマスパーティーが終わったその夜オレは家具のカタログと自分のステータスを見ていた。

ニコラスを倒した時のコルとむちゃくちゃなレベリングをしていたためオレは貯金額は余るほどにあった。家を買って最高級な家具を買っても１０Ｍはあまるだろう。

レベルも急成長のおかげでレベルは９０をこえており半年間休んでも復帰するとしても十分余裕があるくらいだ。レベルを見るとどれだけオレがいかれていたかがよく分かる。

膨大なダメージを受けないとスキル熟練度が上がらないバトルヒーリングが熟練度ＭＡＸになっているのもおかしいしその上位の状態異常無効化もかなりいかれている。

今のところ毒だけだが熟練度を上げれば麻痺やスタンまで無効になるといういかれ

ている能力だ。
多分バトルヒーリングがＭＡＸになるとは制作者側も誰も考えてはいなかったの対応であろうが。
こりゃ誰にも言えないよな。
オレはウィンドウを閉める。
するとトントンとノックする音がした。オレがドアを開けるとサチが立っていた。
「サチ？どうした？寝れないのか？」
「違うよ。私のこと誰かがいないと寝れないと思ってない？」
「……まぁ、それで何しにきたんだよ。」
「ちょっとユニバース。」
「冗談だって。ほら、入れよ。」
むくれているサチを、部屋中に入れる。
「んで、どうしたんだサチ？」
「……本当は昨日伝えようと思っていたんだけどこれ。」
そこにはタイマー式のメッセージ録音結晶だった。
オレはそれの使い方を２つ知っていた。１つ目は大切なことを誰かに伝えたい時。
そしてもう一つは

「……もしかして、サチ、自殺しようと考えたことがあるのか？」
遺書として大事なことを伝えるため。
サチは首を左右に振る。
「違うよ。ただ生きていられると思ってなかったの。」
サチが下向く。
「……私がこの世界から逃げようと言った前の日に長い間仲良しだった他のギルドの友達が死んじゃったんだ。」
サチは下を向き泣きそうになっていた。
「私と同じくらい怖がりで、ぜんぜん安全なはずの場所でしか狩りをしなかった子だけど、それでも運悪く一人の時にモンスターに襲われて死んじゃった、」
正直に圏外でソロプレイヤー以外が一人になることは自殺行為と言える。特に後衛のプレイヤーは特にだ。
「それから、私いろいろ考えてそれで思ったんです。この世界でずーっと生きてくためにはどんなに強くても、本人に生きようって意志がなければだめなんだって。」
そうかもしれない。
サチが言っていることは多分真実だろう。
「本当は、はじまりの街を出たくなかった。黒猫団のみんなとは昔から仲良しだったし、

一緒にいるのは楽しかったけど、でも狩りに行くのは嫌だったんだ。だから本当にここまで生きていられる思わなかった。」

サチがオレの方を見る。

「この結晶は、今日に設定していたのは、今日まで生きていたかったから。」

「今日？クリスマスになんか思い出があったのか？」

「違うよ。去年のクリスマスに雪が降ったの覚えてる？」

「あぁ、クリスマスイブとクリスマス当日にだけ降ったのは覚えてる。」

確か四層で見たんだったはずだ。

「ねぇ。ユニバース、ちょっと街を歩かない？」

「別にいいけど……」

急だったので戸惑ったが了承する。

外に出ると白い雪が上から降ってきている。外にはカップル達だろうか。手を繋いで帰ってきている男女の二人組がいた。

ここの層にはギルドハウスが多いのでその影響だろう。だから、クリスマスの時ぐらいカップル同士二人きりでいたいのだろう。

サチは何も言わずに歩く。オレはただ横を歩く。

たったそれだけだった。しかしサチは涙を浮かべていた。

そしてしばらく歩いたところで転移門前についた。しかしそこにはいつもと雰囲気が違った。

……すげぇ。きれい。

いつもはゴーストタウンで有名だけど今日に限って街中に点灯がつき雪が灯りよってきれいに映っていた。

こんなにきれいなものは始めてだった。

「きれいだな。」

「うん。ほんとにきれい。」

サチも立ち止まりその景色に見る。

「ねぇ。ユニバース。私はキミの役にたてたかな?」

急に言われて少し慌ててしまうが、

「もちろん、たっているよ。」

サチに微笑む。

「オレが苦しい時はなぜかサチがいるんだよ。本当に聞いて欲しかったも愚痴だって言いたかったことも、ギルドのリーダーやっていたら言えなかったんだ。リアルのことなんて誰にも言えなかったからな。」

思えばあの時になんでオレはサチにリアルの自分について話したんだろうか?

「苦しい時は支えてくれるし、オレを、正しい方向へ導いてくれたからな。」
もしかしてオレのお母さんが生きていたらサチみたいだったのかな？
暖かくて、優しくて、一緒いて心地よい。
多分だけどオレはこの世界でサチに会うためにこの世界へ来たのだろう。
「本当にサチに会えて良かった。」
心からそう思った。
「オレにとったらとても大切な人だよ。サチは。」
「……ほんとに？」
「ほんとにだ。」
「……良かった。」
ホッとするサチがすごくかわいく見えた。だけどまた暗い表情に戻る。
「……ほんとは今日こうやって歩くことが私の願いだったの。」
サチがオレにそう言った。
「……あの時はクリスマスまで生きていられるとは思ってなかった。でもユニバースがあの日以来荒れてしまって本当は私たちの責任なのに全部キミが背負ってくれた。でも、私は何もできなかった。」
「それはオレが。」

荒れていたと言おうとしたがやめる。サチは多分そんなことを求めていないのだ。
「……ねぇ。ユニバース、私どうしたらよかったの？キミが傷ついていくのを止めるために何をしたらよかったの？」
オレは何も言えなかった。真実は分かっていた。
オレが傷ついていくのを止める方法を。ただしオレはそれを拒絶していた。
だって、それはオレにも責任があるのだから。
「……ほんとは私に相談してきて欲しかった。辛いことを全部話して欲しかった。でもユニバースは誰にも相談しなかった。多分私が黒猫団のみんなに狩りに行きたくないことを言えなかったようにユニバースも言えなかったんだよね。」
オレはその後の言葉を聞きたくなかった。多分その言葉は真実なんだから。
しかしサチはその一言を言い切った。
「だってキミは誰かに頼ることを知らなかったから。」
その一言が重くのしかかる。しかしそのことは真実だった。
オレは誰にも相談したことがなかった。人から頼りにされることがあっても頼ることは一度もしたことがなかった。
だって、オレは頼る人がいなかったから。
「ユニバース、私もお父さんがいないんだ。」

その一言を聞いた時、オレはサチの方を見る。
「私がちっちゃいころ家を出て行っちゃったから。だからお母さんは私を養うために毎日のように働きに出てたの。だから私も甘えることがよくわからなかったんだ。」
サチがオレの手を握る。手が冷たい。多分冬の夜中に冷たい空気に触れ続けたからだろう。
「でもこの世界へ来てユニバースが出会って毎日一緒に寝てくれて、なんかお父さんみたいだな、って思ってた。でも、本当は違うんだ。多分私はお父さんみたいじゃなくて、もっと近くでキミに甘えたかったんだと思う。キミは私と似ていたから。」
「……」
何も言えなかった。サチの現実のことなんて考えたこともなかった。でも本当にオレとサチの境遇は似ていた。
「だから、キミに死んで欲しくない。私が死んでしまってもキミには生きていてほしい。」
「……無理だよ。」
オレはサチの言葉を否定した。
「…多分オレはもう耐えられない。もう誰も失いたくない。」
もうパーティーメンバーを、ギルドメンバーを失いたくなかった。何よりもサチには

生きてほしい。どんなことがあっても死んで欲しくない。
オレを誰よりも心配してくれて、生きていてほしいと願ってくれる女の子を死なせたくない。
「一緒にこの世界から出るんだ。生きて、現実世界でキミに会いたい。キリトとアスナ、ケイタにサチも全員で集まってオフ会をしたい。」
「私も？」
「もちろんだよ。」
オレは隣で頷く。
「だから一緒に生きていこう。明日も明後日もお互いにずっと助け合いながら、お互いが笑って現実世界に帰れるように。」
するとゴーンと鐘の音が聞こえる。それと同時に街に明かりが消え雪がやんだ。
「……なぁ。来年もクリスマスに雪の街を君と一緒にいたいな。」
「……うん。」
「帰ろうか。今日は家を買いにいかないとな。」
オレは手を引く。
「んで何時に行く？」
「えっ？」

「ついてくるんだろう。サチ。」
笑って答える。
雪の街も好きだけど、夜の街も好きだ。オレは照れることがキミにバレないから。だから、一番伝えたいことがいえる。
「ありがとうな。サチ。心配してくれて。」

繋ぐ想い

目が覚めると懐かしい感触がした。
温かいふわふわしている。
そしてなぜだか締め付けられて動けないけど悪い気はしない。
そして後ろから微かながらに笑い声が聞こえる。
「……サチ、起きているんだったら離したら。」
すると後ろから小さな声で
「……ヤダ」
と聞こえた。オレはウインドウを開き時間を見る。
すると時間は昼過ぎを回っていた。アスナとキリトとケイタは多分攻略だろうし、サチと二人きりだ。
「……でも驚かないんだね。」
「まぁ、昔はずっとサチはオレの部屋で寝てたからな。もしかしたらって思ってた。」
オレは苦笑してしまう。
サチの優しさに救われてきた。

オレとサチの関係はまったくわからない。だからオレはサチとの関係についてはっきりしときたかった。

「……なぁ、サチ。」

「何？」

「……オレと付き合ってくれないか？」

サチがオレを抱きしめる力が一瞬弱くなるが強く抱きしめられる。

「……」

「……」

少しの間オレもサチも話さなかった。何も言わずに無言の時が過ぎる。

正直ムードもないし、シンプルな告白だった。

だけど、今すぐにサチに気持ちを知って欲しかった。

朝起きて、サチがいるだけで嬉しくて、心地いい。抱きつかれると暖かく手放したくない。それにこの世界でも現実世界でもサチの隣にいたい。

そんな気持ちに押しつぶされそうになる。

何分、何時間のように感じる。しかし後ろから微か泣き声とともにはっきりした声が俺に届いた。

「……はい。よろしくお願いします。」

と。
昼食だか朝飯だか分からない飯を食べてからオレたちは少し話をしていた。
まずは、サチについてだ。
サチのスキルには、もう戦闘スキルは残ってないらしい。その代わり計算スキルと料理スキルなどのサポート専用のスキル構成になっているとのことだった。
レベルも攻略組に比べて低い。しかし計算スキルや交渉スキルがずば抜けて高かった。
経理面や取引面でギルドメンバーは支えていたのだろう。
そしてサチにオレのレベル、スキル構成について、全部公開した。
オレのレベルにはサチも驚いていたが、何も言わずにオレの話を聞いていた。
だけど、最後に笑ってお疲れ様。とサチが頭を撫でてきた時はかなり照れくさかった。
そしてギルドメンバーについて、
どうやらキリトが鈍感らしくてアスナがまったく報われてないこと。
ケイタが前よりも頼りになること。
本当に他愛のない話で二時間話続ける。
「そういえば、もうそろそろマイホームでも買いに行くか。」

　オレはメッセージをアルゴに送る。
「そういえばなんでユニバースはマイホームを買おうと思ったの？」
「……攻略組から離れるためかな？」
　オレはため息をつく。
「オレこの世界に入ってからちゃんとした休暇はほとんどとってないんだよ。だから少し疲れたと言うかのんびりしたくてな。レベルも高すぎてもこき使われることはあるしな。それに、」
　オレはそっぽを向く。
「……少し甘えたくなっただけ。」
　するとくすっとサチが笑う。
「そういえば、家はもう決めたんだったよね。」
「あぁ、２２層のログハウスで空いている家があってな。湖が多くていいところなんだよ。何だろう。本とかの知識しか知らないんだけど軽井沢の別荘みたいな感じ。」
「へぇーそんな階層あったんだ。」
「……経験値効率が悪かったからレベリングの時は外していたんだよ。あのときは。色々あるぞ。四層だったら水路の街だし、綺麗だったなぁ。」
　するとくすっと笑い声が聞こえる。

「なんかユニバースって子どもみたい。」
「……そうかもな。」
オレも少し苦笑してしまう。
「ほんとは誰かに弱さを見て欲しかったんだ。多分、誰にも頼らないで生きてきたから。」
オレはサチの頭を撫でる。気持ちよくて心地いい。
サチには泣き顔も、照れた顔も全部見られてしまったし、恥ずかしい姿は全部見られてしまったからな。
「……悪いかよ。」
「ううん。うれしい。」
「……なら良かった。」
そしてメッセージが届く。
用件は取引人の件で今すぐ会えないかと言う話だった。
「行こうか。サチ。」
「うん。」
オレたちは手を繋ぎ歩き出す。離れないように強く、そして優しく。
「……よろしくな。サチ。」

「うん。よろしく。ユニバース。」
ずっと支えていきたい女の子の隣で笑いあえるように。

我が家

「やっと終わった〜!!」
俺は手を伸ばし息を吸い込む。
外の空気は味がないはずなのに美味しいと感じる。
本当の軽井沢にいったらこんな感じなのかなと思う。
周りは森林に覆われ歩いて5分もかからないところには湖がある。
そこに一つだけヒノキの木みたいで香りが良く気持ちいい。
部屋にはさっきまでカタログで見ていた家具が置かれていた。
結局俺とサチと悩んでいる時間が長く丸々五日間考えたこともあり決定した。
その間ずっと考えていたのだが、その結果大晦日の午後四時三十分にやっと片付けが終わった。
「お疲れ。お茶入れるね。」
すると手慣れた様子でお茶を淹れてくれる。
「サンキュ。」
俺はサチが淹れたお茶を飲むためにテラスからリビングへと戻る。

「そういえば今日ってキリトとアスナが来るって言ってなかったか？」
「うん。今日そばに似た者をみんなで食べようって言っていたからもうそろそろ来るんじゃないかな？」
「ケイタも来れればよかったんだけどな。あいつクラインとエギルと一緒に飯食いにいくんだろ。」
あいつらなんか意気投合したらしくよく飯を食べにいくようになったとキリトから聞いていた。
そしてキリトと俺を肴に酒を飲み、夜中まで休日は愚痴をこぼしているらしい。
正直なところサチと二人きりで年末は迎えたかったがアスナからの
「キリトくんが忘年会やろうって言っているんだけど、もしよかったらどうかな？」
というさそいに断れずに俺たちの部屋で新年をむかえることになった。
ということになるとキリトの友人は少ないのでアスナくらいだろう。
でもアスナ。
たぶんキリトはアスナだけを誘っていたんじゃないのかな？
とりあえず苦笑しながらも了承し俺たちは頷いた。
「キリトも災難だよね。アスナに勇気出してデートにさそったのに……」
「それな。あの後キリトの愚痴に付き合わされたからな。」

まぁアスナもテンパっていたからしょうがないだろう。てかキリトが誘われると思っていなかったんだろう。
まぁ大半は俺のせいだけど。
俺が荒れたころにも月に一度は様子見に来たので暇な時間がなかったのも一つだろう。
まぁキリトにヘタレは半年前から変わらないしな。
正直ケイタ以外には付き合い始めたとはいったけどある報告だけはしていない。
「ついでにあのことも話すか？」
「……うん。」
顔を赤くして頷くサチに苦笑する。
俺たちが話しているとコンコンとノックの音が聞こえた。
たぶんだけどキリト達だろう
「んじゃ出るわ。」
「うん。よろしくね。」
といいながらお茶の準備をするサチ。
俺がドアを開けるとキリトとアスナがいた。
「よう。キリトとアスナ、二日ぶりか？」

「うん。そうだね。」
「それで片付けは終わったのか？」
「あぁ、ついさっきな。まぁお茶しか出せないけどゆっくりしていけよ。」
　俺がいうとお邪魔しますと二人が中に入る。
「へぇー。中はこうなってるんだ！。」
「結構広いし近くに湖もあるからなかなりいいとこだろう。まぁ主街区からかなり離れてるのがちょっと不便だけどな。」
「それでもいい物件だろうな。でもお前買えるような金あったんだな。」
「あまり食事も睡眠もとってなかったしコルが少ない敵でも繰り返し狩ってるとやっぱり増えていくんだよ。まぁ基本ドロップ品で剣とかはどうにかなったし、それにいつも余ってる道具は基本売ってたから。」
「コルは余っていたわけか。ところでここいくらだったんだ。」
「３Ｍぐらいだな。」
「ちょっとキリトくん、ユニバースくんきてすぐにお金の話をするのやめてよ。」
　アスナが困ったように俺たちの方を見る。
「隣の物件空いてるし引っ越すんなら早めの方がいいぞ。」
「あぁ。考えておく」

するとうーんと考え始めるキリトに苦笑してしまう。
リビングに入るとサチがもうお茶を出して待っていた。でも
「なんかこうしてみるとキリトと俺ってタメなんだなぁって思うなぁ。」
「そうなの？」
「ベータテストの時こいつが嘘ついてなかったらな。」
「えっとキリトと空太が同じ年ってことは年下なんだ。」
「えっ？空太？」
アスナがびっくりしたように俺たちをみる。
「あぁ、空太っていうのはリアルでの俺の名前だよ。永江空太。俺の本名。ここではお互いにリアルの方で呼び合うようにしてるから。」
「えっと、私たちに教えちゃっていいの？」
「別にいいっていうかどうせオフ会するんなら互いの名前とどこに住んでるかは言わないと会えないんだしそれに。」
俺は一瞬ためらったが
「たぶんサチとはゲームクリアの瞬間一緒にはいられないから。」
するとアスナは目を下に向ける。
そう俺は半年後確実に前線に戻る。

今サチはレベルもスキルも戦闘職から離れており今から前線に復帰するのは難しいだろう。
つまり俺は１００層にいるときはサチはボス部屋ではなく、ギルドハウスで事務仕事をしているだろう。
だから互いに自分を教えないとサチと現実世界で会える可能性は減るだろう。
「そっか。」
「なぁ、ユニバースお前今永江空太っていわなかったか？」
キリトが名前に反応した。
「言ったけど。」
「それって剣道の永江空太か？」
「あぁ。その永江空太であってる。」
キリトはやっぱりと頷く。
「ってかよく知ってたな。剣道やってないと知らないだろ。」
「妹が剣道やっているから知ってるんだよ。孤児院暮らしで全国制覇したって言っていたけど。」
「それは本当だよ。」
「でもなんでナーヴァギアを手に入ったの？孤児院じゃ必要最低限のものしか与えられ

ないんじゃないの？」
「あぁやっぱりそこに触れないといけないよな。」
　俺はため息をつく。
「簡単だよ。俺はナーヴァギアを茅場からもらったからだ。」
「「えっ？」」
「茅場に実証実験と言われてβ版からの研究データを取られていたんだよ。」
　俺は苦笑してしまう。
「多分だけど茅場の目的の一つに俺をこのゲームに巻き込ませるっていうのもあると思う。その証がこのユニークスキルにあると思う。」
　突然出てきたユニークスキル。
「ユニバースお前、その前に茅場とあったことは。」
「いや。一回もない。基本外にでるときは剣道くらいしかなかったし。学校にもあまり行ってなかったしな。あっちがわはどうやらマークしてたらしいけど。」
　俺の経歴を知っていたからな。あっちは。
「そっか。ならなんでユニバースくんを？」
「私たちも考えてるけどわからないんだよね。」
　サチも苦笑している。

「まぁ、正直俺はこの世界に来て良かったと思ってる。だから気にすることはないからな。サチにも会えたし。」
「そっか。暗い話になっちゃったね。私年越しそば作るから。」
「アスナ私も手伝うよ。」
サチとアスナがキッチンに向かう。
男子二人は何もできずただソファーに座って待つことしかできなかった

食事

「……やっぱり何か物足りない」
「うん。」
　アスナのつぶやきに全員が頷く。
　年越しそばみたいなものはすすったのはいいのだが味が何か物足りないのだ
「味覚再生エンジンって調味料ってほとんどダメなんだよな。料理スキル上げている二人が使ってこれなんだし。」
「うん。でも、ＳＡＯでの料理は簡略化されすぎてるから。」
「本当詰まらないよね。」
「俺もリアルでは作れるんだけどなぁ。」
「えっ？ユニバースも料理できるの？」
　キリトが驚いているけど
「一応簡単なものだけ。アスナみたいな本格的なものは無理。ってか俺孤児院で料理担当だったし。」
「そうなんだ。でも、なんで料理スキル取らなかったの？ユニバースは余裕あるよね？」

「アスナとじゃんけんして負けたんだよ。料理スキル上げるのに三人だけのギルドで飯もほとんど同じだったから一人いれば十分だろ？俺は一応裁縫あげているかな？後釣りスキルは完全習得してある。」
「……釣りスキル完全習得って。」
「そういえば急成長って熟練度あるのか？」
　キリトがそんなこと聞いてくる
　そういえばいってなかったな
「ある。今熟練度が５２７なんだけど、効果がかなりやばい。…経験値、熟練度、ステータスの倍率を５倍アップするって。」
「……神聖剣より異常じゃないのか？そのスキル。」
「あぁ。このスキル最初から熟練度１００からあったから多分熟練度い上がる度１％あがるって考えた方がいい。多分Ｍａｘ１０倍の効果になると思う。まぁこのスキルは何かのスキルを使えばいいんだけど。スキル熟練度の上り方はこのスキルに対応してないのか普通だけど。」
「そのスキル本当にチートすぎるよ。……それじゃ完全習得してるスキルも多いよね。」
「今の所五つかな？片手剣、重装備、戦闘時回復、釣り、盾スキルくらい。もうそろそろ軽装備と回避も完全習得しそう。」

「ユニバース、軽装備と重装備の二つともとってる人って初めてみたよ。」
　サチが驚いたようにしていたが
「サチにはスキル構成伝えたろ。」
「でも、昔のまんま索敵とか隠密とかとってないのか。隠密も途中から軽装備に変えただろ。」
「とってないな。隠密も索敵も一応スペースはあるけど、スキル上げが両方面倒くさい。」
「裁縫スキルは？」
「今は８００超えたあたりかな？最近あまりやってなかったから…」
　裁縫スキル最近カンスト者でたらしいけど結構好きだからなぁ。裁縫リアルでもやってみようかな？
「ってかスキル構成はマナー違反だろ。……それよりもキリト達は攻略スピード明らかに落ちてるけど。」
「仕方ないでしょ？ユニバースくんのマップ攻略速度が速すぎるんだよ。それに次は５０層だし。」
「クオーターポイントか。……さすがに気をつけろよ。あの時俺らとあの男しか役に立たなかったんだから。」

２５層ボス
俺もレッドラインまで落ちた時の二回はここだ。
メイン盾としていたが、その攻撃威力と硬さの異常さが辛かった。
そして死者１５人という膨大な死者を記録した
でもそれに耐えらたのは俺とヒースクリフの二人だった
「……今回もかなり辛い戦いだろうな。多分メイン戦力の三ギルドはかなり負担がいくだろうな。」
「えぇ。小規模代表は今度からユニバースくんがやるんでしょ？」
「……聞いてないんだけど。」
「まぁ、団長はユニバースだからね。」
「……俺団長なんだ。ケイタの方が向いてると思うんだけど。」
「だめだよ。空太が作ったギルドだから。」
　責任は取らないといけないってことか。
「了解。次いでに試験も俺がやればいいのか？一応減ってきてるけどまだ来てるんだろ。入隊志望。」
「うん。頼めるかな？」
「暇だから別にいいけど。少しヒースクリフに頼まれたことも同時進行でやっていいか

？」

「……何か言われたのか？」

「あぁ。下層のレッド体制を整えて欲しいらしい。睡眠ＰＫが最近多発してるらしいし。今シンカーにも頼んでるけど。キバオウの勢力の対処にも追われてるらしいし。」

「それってかなり危険じゃないの？」

「いや？それほど危険じゃない。笑う棺桶相手にするわけじゃないし。レベルも一番高いし戦闘時回復が毎秒１０００ある。下層の相手くらいなら正直敵じゃない。ＨＰも４万超えたしな。基礎ステータスではヒースクリフよりも高い。」

「急成長強すぎるでしょう。」

「本当にチートだよな。」

「ユニークスキルってそういうもんだろ。まぁ、昔に戻っただけだし、大丈夫だろ。危なそうだったらキリトとアスナ呼ぶし。サポートの手加減覚えたからなにあっても相手は死なないからな。それに麻痺毒のある片手剣を手に入れたしな。確か４０層のラストアタックボーナスだけども。」

性能は最悪だったがモンスターにも3秒くらいは効く麻痺毒だ。

「……サチは大丈夫なの？」

「うん。正直行ってほしくはないけど、でも空太は大丈夫だと思うしそれに」

　サチがニコリと笑って
「ちゃんと帰ってくるって約束したから。」
「……そういうこと。まぁ、生きてるし当分の間は無茶はしないと思う。」
「当分の間ってする時はあるの？」
「一応ある。…１００層ボス茅場晶彦との戦いだよ。」
　するとみんなが目を見張る。
「多分俺とヒースクリフがクリスマス会の時一度話したんだが、頂上に行けるギルドは壊滅と撤退合わせて二ギルドが、最高だと判断してる。ＫｏＢとガーディアンじゃないかと思っている。」
「……なんで？」
「一つ目まずこの二グループはレベルが高い。うちらはサチ以外のレベルはトップに近い。ケイタも聞いたら５５ってかなり高いしな。どうせキリトとアスナは余裕で６０は超えてるだろ。」
　急成長スキルで一時期レベリングかなりしてたしな。ケイタとパーティー組んでたならそれくらいは上がってるだろう。
「そして少数とはいえかなりプレイヤースキルも高い。それにＬＡをとってる人は基本俺、キリト、アスナがほとんどだ。」

「……そうなの？」
　サチは知らなかったけ？
「キリトが５割近くの２３層、その次は俺の１７層、そしてアスナが５層。ってアルゴが言ってた。」
「……キリトくん取りすぎじゃない？」
「そんなにとってたのか？」
「あぁ。ケイタも一回とったことがあるから、言いたいことはわかるな？」
「４９層中４６回が私たちのギルドにＬＡボーナスがとってる。」
「そういうこと。アイテムでも断然俺らの方が有利なんだ。装備面でも色々下層に支援をしてるとはいえ装備品や回復アイテムを無料で引き渡したりはしないだろ？」
　それは俺が昔からしていたことだ。適正値段で下層に売っていた。
　ＬＡボーナスはかなり優秀であることが多い。だからやっぱりそれなりの値段で売らないと公平性が失われるのだ。
「……つまりは小規模ながら実力者が揃っていて装備も安定してる。そして防御、アタッカーのバランスは不安定だけども最悪キリトがガードできるし。ってかこのメンバーくらいなら正直一人でもいけると思う」
「……そういや。イエローゾーンに落ちたのって最近ないんだよな。ニコラスの時も

ポーションも結晶も一度も使わなかったみたいだし。」
「「えっ？」」
「……ってか体力へってもオートヒーリングでほとんどすぐに回復してしまうんだよ。ニコラスって秒間３００くらいだったし、かもクールタイムが長いから喰らっても次、回避すれば全回復するんだよ。」
「それはもしかして。」
「うん。どれだけ戦っても死ぬ可能性はなかったってことだ。鎧と盾もも最近　ＬＡ手に入れたもの使ってたし。強く設定してたらしいけど…正直敵じゃなかった。」
　オートヒーリングと急成長のコンボってかなり強すぎるだろ。
「……でも、もう二度としないでよ。心配したんだから。」
「わかってるって。」
　俺は苦笑してしまう。本当二度とやらないわ。
「……でも、５０層攻略にユニバースくんがいないのは正直辛いね。今までヒースクリフさんと二人いれば死者はほとんどなかったのに。」
「……本当に悪い。でももし５０層の攻略の依頼が来ても断ろうと思ってる。」
　さすがにサチを今まで心配させてきたから側にいたいしな。
「当分の間は大人しく家でのんびりしとくかな？結婚システム使うことになったし。」

「「えっ？」」

キリトとアスナは驚いたような顔をしていた。となりのサチは顔を真っ赤にしている。

「…えっと俺たち結婚しました。」

少し顔が熱くなりながら苦笑してしまう。

サチも照れながらテーブルの下で手を繋いでくる。

それが妙に照れくさい。

「えっと、おめでとう。ユニバースくんとサチ。」

「おめでとう。ユニバースとサチ。」

「ありがとうな。でもさ、結婚したとはいえ変わったところはほとんどないんだよな。特にステータスも元々教えていたから別に関係ないし。サチとは共有ストレージ持ってたし。」

正直結婚とはいえ変わったことはほとんどなかった。

「まぁ結婚指輪をすることになったくらいかな？あまり後財布も共通化したくらいか。」

「そういやサチとユニバースくんって元々仲はよかったよね。」

「まぁな。元々似た境遇だったのが良かったのかもしれないな。」

俺は苦笑してしまう。

「まぁ、ってことで報告終了。まぁ、あまり変化はないと思うからあまり気にしないでくれ。ってことでしばらくは休む。ヒースクリフからの依頼も一ヶ月間はしないって言ってあるし。少しのんびりするかな？」
「そっか。二人ともいいなぁ～。結婚システムなんてカップルになっても結婚まで行くグループはほとんどないよね？」
「さっきも言ったけど今更だからな。それに好きな相手に隠すことなんてないだろ。それにあんなことがあったのにちゃんとまた俺を受け入れてくれた。それに帰るべき場所ができたからな。もう死ねないだろ。」
　生きる意味を与えてくれた。愛の言葉も何もいらない。
　ただ生き残って現実世界でサチと暮らしたい。
　ずっと君と残りの人生を歩んでいきたい。
　それだけで幸せを感じることができるのだから。
「でもさ、お前らもかなり人気だろうが。キリト最近告られたんだろ？」
「えっ？」
「そういえば下層の女子プレイヤーからは人気だもんね。キリト。」
「まぁな。断ったけど。」
　このギルド案外人気高いんだよなぁ。

アスナもキリトも序盤から引っ張っている攻略組の一員だし
俺も何人かに告白はされたことはある。
俺たちは下層に降りることが多かったのでそれがまた人気の一つになったわけだ。
そしてサチも同じく人気の高い一人だ。
数少ない女子プレイヤーでありながら誰にでも優しいお姉さんとして下層の年下の男性から人気がある。
ケイタも下層の優しいお兄ちゃんとして年下の女子から人気あるし
本当にこのギルドモテる奴ばかりだよ。まぁゲーマーからだけども
ゴーン
するとどこかから鐘の音が聞こえてくる。
「お、除夜の鐘じゃね？多分始まりの街の鐘の音だろうけど。」
「ってことは、もう二年目か。今年中に８０層までは行きたいな。」
「あぁ。ここから一気に難易度は上がるだろうし、油断はできないな。でも、俺たちは絶対に生き残ることだけを考えろよ。俺はとにかく早速５０層攻略が控えているんだぞ。」
「そうね。私たちはエギルさんとクラインさんといつものパーティーになりそうね。」
「あの人中身はいいんだけどなぁ。見た目が少し怖すぎるんだよ。」

優しくていい人なのに見かけのせいでちょっと距離置いてしまうんだよなぁ。
「まぁ、頑張れ。その分ＬＡボーナスとかはすごくいいものだと思うし。俺なんかチートスキルもらったしな。」
「みんな、攻略の話くらい新年になるのにやめようよ。」
サチが苦笑している。
「悪い。悪い。じゃあ来年もみんな揃ってまたここで集まろうか。」
「そうだな。でも死ぬなよ。」
「お前もな。」
するとキリトと顔を見合わせ笑い合う
そして
「「「あけましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします」」」
アインクラッドで二度目の年明けを迎えた。

面倒ごと

「空太、今日の夜ご飯何がいいかな？」
「別になんでもいいや。でも肉系統で。魚は食べ飽きてるし。」
俺たちはギルドハウスの中で電子メモ帳に追われていた。
休業してから約２０日がたった。
５０層攻略が終わりキリトとアスナもケイタも無事だったらしいが、やっぱり犠牲者は多かったらしい。
六人が死に、また攻略組二つの小規模ギルドの撤退
少し悩ませる結果となってしまった。
「……はぁ。ってかなんで改善策を俺に押し付けてくるんだよ。」
ＫｏＢ副団長から改善案を出せと言われていた。そんなこと簡単にできるならもうやってるというのに。
「……はぁ。デスクワークってこんな面倒だったんだな。昔の俺よくやってたよ。」
「それはデスクワークじゃないと思うけど…」
「仕事しないって伝えてたのに…本当にウザい。どっか遊びに行きたいな。」

結局攻略組は自分のためで精一杯なのか面倒ごとを押し付けてきた。
キリト達が反論してきたがさすがに迷惑をかけるわけにはいけないと思い引き受けたのはいいが
解決策がほとんど思いつかない。
本当に手詰まりなのだ。
攻略からもう一年経っているので新規の攻略ギルドはほとんど少なくなっていた。
それにどんどん攻略組の雰囲気は悪くなっており、対立しているグループが多くなっていた。
ガーディアンにも対立しているグループがいる。
主に血盟騎士団と聖竜連合などの大型ギルドだ。
攻略だけではなくて下層の支援を行なっている俺たちの存在はやは気になるのか、あらゆることで面倒ごとを押し寄せてくる。
今回の一件もその一つだ。
しかし下層の人達や中規模、小規模の攻略ギルドには親密な関係を維持している。また商人ギルドの信用も得ておりクエスト情報を提供したり、関連クエストに協力するかわりにポーションを格安で売ってくれていた。
なので大型ギルドはあまり大まかな嫌がらせはできなくなっているのだ。

「……はぁ。ギルドでももう三人戦闘メンバーほしいところだし、サポートもサチ以外にもう一人欲しいな。サチも働きすぎだし、もうそろそろローテ組めるようにしないと。」

「……どうして？」

「今前衛２、後衛２のバランスだろ？アスナも一応前衛として活躍できるけどスピード特化だしキリトも多少筋力パロメーターは上げてるけどやっぱりスピード型だ。……ここメイン盾俺しかいないんだよ。」

「……あっ！」

「それにさすがにここから上層になるにつれてやっぱり火力やスピードは大事になってくるだろうし。何よりモンスターに挟みうちにされたとき、誰かの死に繋がる可能性が高い。後前衛が二人と後衛がもう一人きたらもう一パーティー組める。そうしたら週３攻略、週３下層の見回り、一日休暇とバランスよくできるんだよ。前衛ができてスイッチできる人がいてサポート要員がいると結構ありがたいしな。」

俺もいつまでこの硬さを維持できるかわからないし、アタッカーとしてでないといけない時もある。そうした場合俺の他に筋力パロメーター重視の人材がやっぱり欲しい。それに休暇は今の所不定期でとっているので定期的に取れるようになると疲れも溜まりにくいだろう。

「……後衛2、前衛1でもいいんだよなぁ。アスナとキリトは経験豊富だから俺のところにもう一人つければいいし。全員で行動するとなれば盾2でも普通のパーティーなら回せる。階層ボスでも十分回せる。火力より耐久とサポート要員が少し欲しいな。うち火力特化ばっかりだし、それに突属性武器と打属性武器を扱える人が欲しい。いくらなんでもスケルトン系に弱すぎる。」

「うん。それにアスナ、お化け系統苦手だもんね。怖がりってキリト前口滑らせてアスナに怒られてた。」

「……あのバカ何してんだ。まぁメイル系の盾役とできれば短剣のサポートメンバーこの二人は欲しいな。なぜかＳＡＯは六人パーティーの仕様だし。」

「……どんどん目標が小さくなってるね。」

「仕方ねぇだろ。あんまりギルド人数増やしたくないんだよ。」

　元々信頼できる人しか加えていないギルドだ。人柄、性格など多くの項目でクリアした人しかいれていない。

「……はぁ、レッド対策するついでに下層に探しに行くか。せめて一人くらいは見つかるだろ。そういえばサチギルド資金は今どれだけあるんだ？」

「今は３００Ｍぐらいかな？かなり削れるところは削ったから。」

「……よくそんなに貯めれたな。」

サチは家計とかのチェックもしていたらしく、計算スキルがなくても節約できるところは削ったりしてギルド資金は豊富になっていた。
ポーションが結晶アイテムは基本的にギルド資金から出していたが、下層の支援をドロップ品の中から、下層で使えるものを安価で売ったりした結果らしい。
「……それじゃ、一応ギルド人数増えても大丈夫かな。少しくらいなら余裕もあるだろうし。」
「うん。でも、戦闘以外の人を雇う余裕はないと思う。最近少し支出が多くなってるから。」
「…５０層の時結晶アイテムとポーションをかなり消費したって言っていたからな。しょうがないか。」
俺が夜少し手伝えばなんとかなるだろうし、
「……はぁ。大型ギルドがもう少し下層の支援に目を向けてくれていたらなぁ。最近なんか軍の動きもおかしくなっているらしいし、少し考えていかないと。」
「でも、攻略組ってやっぱり雰囲気はよくないよね。特に聖竜連合は大型ギルドだけど、ＫｏＢとガーディアンが最強ギルドだと思われていることが、嫌みたい。何度も引き抜きにきたり合併したいってきてるんだけど…アスナが本当に嫌がっているから何とかしないと。」

「引き抜きか。……正直な話引き抜きに関しては別に何も言うつもりはないつもりだったんだが…ヒースクリフと少し相談するか。牽制がわりに恩を売らせておくのもここはいい所だろう。」
　案外俺とヒースクリフの仲は悪くないんだよな。攻略に夢中なヒースクリフだがユニークスキルの使い手として何度も話し合っているのがやっぱり大きい。
　迷惑行為は本当になんとかしないとな。
「そういや、サチは引き抜きにあったことはあるのか？」
「三回あるけど…断ったよ。私はこのギルドからこの世界が終わる時まで離れないでいようと思うから。」
「そっか。」
　サチで三回か。戦闘面で活躍できないサチでさえ勧誘がこんなにきてるってことは
　……かなりまずいな。
「……結構焦ってるな。最悪強行に出てもおかしくはない。ってか迷惑かけるようなら、もう完全に敵対化した方がいいかもな。一応俺たちのギルドは下層の支援と生きるために作ったギルドであって、攻略を目的としたギルドじゃないからな。」
「……そうなの？」
　知らなかったのか、首をかしげるサチ

「下層の支援は元々は俺がアルゴとやり始めたのをきっかけにしたことだけど、元々はこのギルドは生き残ることを目的としてるんだよ。一層のフロアボス攻略戦の後ギルドメンバーの命を守ることを目標にしたギルドを作ったのがガーディアンだよ。だからサチが入って戦闘職から離れて支援に回ったときも誰も何も言わなかっただろ。」
「うん。でも、それはこのギルドにいなかったからじゃないの。」
「違う。まぁ確かにそれもあると思うんだけど、元々このギルドに入る条件は普通の人なら基本攻略組じゃなくても入れるんだ。ただ意識の問題なんだよ。昔の話になるけどケイタに聞いたんだ。力を何のために使いたいかとな。ケイタは即答で誰かを守るために使いたいと答えた。最近同じことを聞いたけど全く同じだった。」
生きる。それがこのギルドの方針だ。
利益より命を大事にすること。それは仲間と自分の生きる道を最優先する。
それは何よりも大切なことだから。
失った人はもう二度と取り戻せないんだ。だからもう前を向くしかない。
「このギルドに入る条件は守りたい人や物があるか。ただそれだけなんだよ。」
恋人、友人、なんでもいい。ただ守りたいものがあるか
「まぁ、ストーカーや色目狙いの人はお断りしてるけどな。」
「ストーカーとかいたの？」

「あぁ。少しアスナの追っかけで凄く追放するのに一苦労だった。」
　アスナはアインクラッドの中で５本指に入るほどの美人と言われているほど人気が高く、正直このギルドの顔と言っても過言ではない。
　そのぶんこういう面倒ごとを持ってきやすいのだ。そういう案件が一件だけではないことがアスナのすごいところなんだよな。
「まぁ、そういう人以外なら別にいいんだよ。人数は俺は多分１０人未満の小規模ギルドにすることは方針で決まっているから。…ってなんで関係ない話してるんだろう。サチ仕事終わったか？」
「うん。終わってるよ。」
「じゃあ今日は帰ろう。こっちはもう終わりそうにないからまた今度考える。」
「それ昨日も同じこと言ってたよ。」
　サチは苦笑している。
「私はいいけど。でも空太。」
「ん？」
「わたしのことはいつになったら名前で呼んでくれるの？」
　その一言に黙り込んでしまう。
「えっと、それは…」

「……」

サチは笑顔だけどその笑顔がとても怖く感じる。だから正直に言う。

「……恥ずかしいんだよ。名前で好きな女の子に呼ぶの。一回呼んだ時噛んだしな。」

「うん。でも私も恥ずかしいけど…」

「……だよなぁ。」

あきらめるか。もう。

「えっと千代。」

すると顔を真っ赤に染める。佐伯千代。苗字と名字の最初の一文字からとってサチにしたらしい。

やっぱりなんか

「恥ずかしいな。なんか。」

「でも、私は嬉しいけどなぁ。」

「ねぇ、二人とも。私ここにいるの忘れてない？後二人の世界に入るのやめてもらっていいかな？」

アスナがげんなりとしている。

「アスナ、どうしたの？今日休みじゃなかったの？」

サチが驚く。今日はギルド自体が休みだったのでアスナ達はこないと思っていた。

「キリトくんもケイタくんも下層に武器買いに行ったから、二人の仕事を手伝いに来たんだけど…」
「それは悪かった。完全に気づいてなかった。ってかちゃんと今までは仕事してたし。」
「うん。二人とも真剣な様子で仕事してたから話しかけなかったんだけど…あの、凄く言いづらいことなんだけどちょっとお願い聞いてもらっていいかな？」
　すると真剣な様子で話しかけてくる。アスナ
「どうしたの？」
「えっとね。最近私のホームが聖竜連合の班にバレて。」
「アスナ。お前本当に大変だな。」
　もう、この時点でもうはっきり理解した。またストーカー被害だな。
「……でもどうすればいいの？前までは鍛冶師の女子プレイヤーのところに泊まってるって言ってなかった？」
　へぇ～確か噂で聞いたことあるな。でも本当に
「リズは最近４８層のリンダースで欲しいお店があるからって目標の２００万Ｇ集めてるから。」
「それは俺が出してやるからアスナを匿ってほしいって伝えてくれ。」
　俺は即答で言うと二人は驚く。

「えっと、ユニバースくん？」
「そのリズって女の人のこと信頼してるんだろ？それならそれくらい出してやる。その代わり半額は返してもううことの条件付でだけども。ギルド資金じゃなくて俺のマネーから出せばなんとかなるだろ。」
「うん。その方がいいかも。私たち一応お金には困ってないし、まだ資金には余裕があるから。」
「でも。」
「安全を確保できるんなら、それが最優先だ。アスナは俺たちのところはさすがに居づらいだろうし。宿屋も比較的危険だ。多分ホームに戻って来てないことがバレたんなら多分最初は宿屋に当たるだろうしな。基本金貸すのはあまりしたくないんだが、状況が状況だ。最悪アスナの礼金としてはらうからいい。少しくらいは日数稼げると思うしその間に対応しておく。だからもし信頼してるんなら少しの間匿ってもらえ。団長命令だ。」
　そうしないとアスナの性格上頷くことはないことはわかりきっていた。
「……はぁ。わかった。ユニバースくん本当にごめん。」
「アスナが悪いわけじゃないだろ。でも少し聖竜連合とはこれで完全に対立する。最近ちょっと度が過ぎていたしな。明後日そのリズっていう子に会いに行くから。」

「うん。じゃあ案内するけど…」
「うん。とりあえずメッセージ送っといてくれ。一応今日はうちに来た方がいいだろ。キリトとケイタも呼んで対策考えるから。サチ悪いけど。」
「大丈夫。その代わりアスナは買い物手伝ってほしいな。全員分の材料とか用意しないといけないから。」
「うん。ありがとう。じゃあリズにメッセージ送るね。」
　するとウインドウを開いてメールを送っているようすだった。
「本当にここにいる限り俺たち休めないかもな。」
「うん。」
　俺とサチはため息をついた

迷いの森にて

「……久しぶりにマップに出れたのはいいんだがここかよ。」

俺にとって本当に嫌なマップだった。今３５層にある迷いの森に来ていた。

ここは俺がキリト達に剣を向けたところなのにあまり来たくなかったがある依頼のため来ないといけない羽目となった

結局アスナの件が完全に解決したのは二月の三週目を過ぎた辺りだった。聖竜連合も攻略組の一員だったので、かなりの揉め合いになりヒースクリフの仲介だけではなく、他の小型ギルドやソロプレイヤーまでこっちの味方をしてくれた。どうやら、他にも強引な引き抜きが多いかったらしい。

風林火山のクライン曰く大型ギルドに対抗できなかいプレイヤーが多かったのことだ。この結果ソロプレイヤーと小型ギルドの要望は通され聖竜連合は二度と引き抜きを行わないように仲介役の商人ギルド代表から命じられた。また下層、小型ギルド、ソロプレイヤーの連合が作られることになりその連合長に俺が選ばれるなど仕事がかなり増える羽目になった。

本当どうにかして休みたい。これじゃあ攻略してた方がよっぽどマシだ。

そしたら今度はオレンジギルドの捕獲の催促である。
本当に休みをくれ。早く現実世界に戻りたい。そして千代とゆっくりしたい。
そんなこと考えながら歩いていると四匹のモンスターと一人がマップ上に出てくる。最近キリトから取り直した方がいいと言われた索敵スキルだろうか。熟練度はあまりないがケイタとヒースクリフから借りている装備のおかげで対人間のハンティングは見抜けるようになっている。
てかここのフィールドでソロプレイヤーは結構きつい。前衛の火力とスピードを兼ね揃えたキリトみたいならまだしもここのモンスターは回復してくるから非常に厄介なはずだ。
俺は急いで走ると奥に3体のモンスターと座り込んでいる女の子の姿がいる。
まずい。俺は片手剣を抜き範囲攻撃のホリゾンタルを三体に同時に与える。今のレベルとこの武器ならば一格なので大丈夫だろう。すると3体は電子片となり消えていく。
どうやらプレイヤーは守れたらしく少しホッとするが、俺に怯えた様子だった。
ってか見ると小学生くらいの身長をした女の子で装備品は短剣。
……そりゃ怖いに決まってるか。
「大丈夫か?こんな時間はあまりソロで行動しない方が。」

と俺は下に羽みたいな物を見つける。
俺はそのモンスターのことを知っていた。第８層にしか生息しないフェザーリドラの羽だ。ペールブルー色の羽で可愛いとアスナが倒すのを惜しみながら戦っているのを覚えている。
ってことは、テイマーかこの子。
そして羽しかないってことは
「…悪い。君の友達助けられなかった。」
俺がいうとその少女は泣き出す。
「お願いだよ……あたしを独りにしないでよ……ピナ…」
「……」
その一言にずきっと胸が痛む。独りの辛さは知っている。そして好きな人がいなくなった辛さも知っている。
今この少女はどんな気持ちでここにいるんだろうか。でも、この想いの強さだったら
「そのピナなら蘇生させる方法があるぞ。」
「……えっ？」
するとその少女は俺の方をみる。
「その羽が『ピナの形見』じゃなくて『ピナの心』だったら蘇生させる方法はある。だか

らとりあえず確かめてくれ。」
　すると急いでその少女は視線を落とすと
「……ピナの心って書いてあります。」
「なら４７層に『思い出の丘』というフィールドダンジョンがある。そこでてっぺんにに咲く花がどうやら使い魔蘇生アイテムらし」
「本当ですか？」
　するとその少女が希望を取り戻すが
「……４７層…」
　するとその少女が釈然としないようすでこっちを見る。
「……失礼だと思うがレベル聞いていいか？」
「……４４です。」
「……なるほどな。」
　確かに厳しいけど。この少女に昔の俺みたいなおもいはさせられない。
「俺がガードしてと装備品をアスナあたりから借りたらいけるがどうする？」
「……えっ？」
「行くんなら俺たちのギルドが護衛するけどどうする？」
　すると驚いたようにこっちを見てくる少女。

「なんで……そんなことしてくれるんですか？」
　警戒をしているようだしいいか。
「俺と同じ思いをして欲しくないから。」
　その一言に少女は固まる。
「俺はリアルでは独りでさ、親も親戚でさえいないんだよ。ずっと独りでさ。今はギルドメンバーや彼女がいるけど…正直なところやっぱり独りでいるのは結構辛いし寂しいんだ。」
　少し苦笑して
「ただそんな人を見るのが辛いだけ。だから、どちらかというと自己満足に近いかな？」
　決してそれは人助けでも何でもない。ただの自己嫌悪だ。
「……悪い。迷惑だったら。」
「いえ。じゃあお願いしてもいいですか？」
　その一言に少し微笑んでしまう。ちょっと気を使わせちゃったかな？
「ならちょっとギルドハウスに来てくれないか。すぐにアスナに連絡して事情を話すから。」
「はい。えっと、あたしはシリカと言います。」
「俺はユニバースだ。よろしく。シリカ。」

少し笑いながら右手を差し出す。そしてこれが竜使いシリカとの初めての出会いだった。

３５層主街区に戻ると人が押し寄せてくる。どうやらシリカという少女の名前は人気者らしく男性プレイヤーを引き連れていた。

元々俺たちのことを知らないのか、そもそも人気者として有頂天になっていたのだろう。少し名前を言った時残念そうな顔をしていた

そしてそのことを自覚してるんだろう。ここに戻る間の顔や発言はどれも後悔を引きずっていた。

……こういうプレイヤーは強くなる。

俺はそう思っていた。一度失敗や後悔を経験しそれに立ち直るようなプレイヤーだったなら。

「……おい。あんた。」

「ん？」

「見ない顔だけど、抜け駆けはやめてもらいたいな。」

その一言にカチンとくる。

「あんた、それ本気で言ってんのか？」

「えっ？」

「人はアイテムじゃないんだ。誰にだって意思があるし、考えや感情がある。それ以前に俺は結婚してる。だからシリカを……決して誰かをマスコットにしたりはしない。」

ただそんなことはシリカにもそのアイドルみたいに扱われる人に迷惑だ。

「シリカ行くぞ。」

俺は手を引く。こんな人間からは離れたかった。

そしてしばらくたって。

「ゆ、ユニバースさん。」

「ん？どうした？」

「手を離してもらえると。」

「……わ、悪い。」

俺はとっさに手を離す。するとあっと小さな声をあげ残念そうにするシリカ。

……なんか妹みたいだな。この子

なんか守りたくなってくる感覚がある。多分そういう面があのプレイヤーを釣るのか。

「……悪い。ついムキになった。最近ちょっとこっちのギルドでも同じ案件で揉めていたから」

「……いえ。大丈夫ですけど……でも、ありがとうございました。なにから何まで助け

てもらっちゃって。」
「……だから、自己満足って言ってるから礼はいい。それならピナを助けてやってからだ。」
少しため息を吐く。俺はオレンジギルドの捜索にきたのにな。少し御節介がすぎるし
「ちょっとギルメンに連絡するからちょっと待っててくれ。今回の件ちょっとサチに報告しないと泣かれるし。」
「あ、はい。」
俺は近くの道具屋の裏に向かいギルド用に緊急メッセージを送る。するとまずサチからメッセージが届き、その後にケイタ、キリト、アスナと続く。そして誰も了承して夜8時を回ってるにもかかわらず集まってくれるらしい。
「……なんでこんなにいいやつばっかりなんだよ。うちのギルドは。」
少しどころじゃなくてかなりお人好しな奴らばっかりに少し笑顔が隠せない。
正直なところうちのギルドはこのゲームを楽しんでいる。色々なところで休みながらも攻略は順調だしなによりも精神的な余裕がある。攻略は休みは他のギルドより桁違いに多いし、できるだけ希望も取り入れるようにしている。
なので正直他のギルドよりも安定している。

レベル上げも順調だしここの二カ月はほとんど出費も抑えられている。
やっぱりずっと一緒にいたいな。あいつらと。
そんな本心からそう思う。
さて、帰ろうか。
俺は元いた道に戻ろうとすると
「へぇ、てことは。『思い出の丘』に行く気なんだ。でも、あんたのレベルで攻略できるの？」
「……」
また面倒臭いことになった。俺はもう一度ギルドメッセージを送る。
その後ため息をつき
「シリカ。行くぞ。」
「は、はい。」
俺が言うとすぐに話を切り上げこっちに話してくる。
どうやら嫌な体験があるそうですぐにこっちに走ってくる。
すると一瞬奥の女性プレイヤーがこっちを見てくると俺は一礼して後ろを向く。
「……大丈夫か？」
「はい。でも…」

「いいから。俺たちのホーム19層だからとりあえず向かうぞ。君に話さないことも増えたし。それに一応うちのギルドのシェフが晩飯用意して待ってくれてるらしいから。晩飯もそこで。」
「えっ？でも悪いですよ。」
「……いや。ちょっと、いやかなりまずい状況になってるから。」
「…どういうことですか？」
「いいから。飯食いながら話す。」
俺はもう真剣だった。するとシリカもそのことに気づいたのか頷く。
そして転移門使ってギルドハウスのある階層へ転移した

竜使いと守護者

「ただいま。」
「おかえり。空太。」
「おい。サチリアルネームだすんじゃないって。今日はギルメンじゃない人がいるんだから。」
「ご、ごめん。」
「……ゆ、ユニバースさん。」
　すると震えだすシリカ
「シリカなんだ？」
「なんでサチさんがいるんですか？」
「いや何でってギルメンで俺の嫁だからいるに決まってるだろ。」
「……」
「おいサチも顔赤くさせんな。俺だって恥ずかしいんだから」
「えっと、ユニバースさんって何者なんですか？」
「いってないの？ユニバース？」

「正式な挨拶はみんながいるほうがいいだろ？ってか俺のこと知ったら少し下層だったらめんどくさいんだよ。主に女子プレイヤーから。」
「もうせっかくの好意を面倒とか言ったらだめだよ？」
「へいへい。シリカには言ってないけどアスナって聞いた時に分からなかったのか？」
「だってユニバースさんガーディアンって途中メンバーが二人しかいない最強ギルドですよね？なんでユニバースさんが？」
「そっか、中層は今でもサチが担当しているからな。俺のことも知らない人は多いか。ついでに最強ギルドなんかじゃない。ただの小型ギルドの一つだよ。」
「本当に最強ギルドって呼ばれるの嫌だよね。ユニバース。」
「最強って俺たちは目標のベクトルが違うって言っただろ。全員が生き残る。それが俺たちの理念だから。」
「ユニバースは本当にそこだけは譲らないよな。」
　するとキリトが笑っている。
「ただいま。キリト。そこが設立した時の唯一の規則って言っただろ。」
「おかえり。ユニバース。まぁ、そうだけどさ。」
「だから、正直な話オレンジになるようなことをしなければ別に俺はギルメンを守るしどんな時だってギルメンの味方につく。まぁさすがに迷惑行為とか聖竜連合みたいな

真似をする奴には許すわけにはいかないけどな。」
「……お前本当にこのギルド好きすぎるだろ。」
「そりゃ。現実に比べたら天国みたいじゃねーか。独りよりみんなでいた方がいいだろ？」
「本当にお前このゲーム楽しんでるな。」
「お前もな。」
　ニヤリと笑う。フリーズしているシリカに苦笑しながら
「そういや、メッセージでも伝えたとおりテイマーのシリカ、３５層でソロで歩いていたところを保護した。どうやらパーティーメンバーと喧嘩したらしく、」
　と俺がキリトに伝えてると
「キリトくん。ユニバースくんたち呼びに行って何分たってるの？」
「あ、ただいま。アスナ。」
「おかえり。ユニバースくん。」
　アスナが奥の部屋から出てきた。
「それでシリカちゃんだっけ？アルゴさんから少し情報を教えてもらったんだけど…」
「アルゴ来てんのか？」
「うん。どうやら依頼の件で報告に来たって。」

「……そういえばそのこともシリカに話さないとな。」
　やることが多すぎる。
「えっととりあえずゆっくりしていってくれ。４７層のモンスターとかの説明をするから遅くはなるとは思うけど…」
「は、はい。」
「とりあえず飯にしようか。腹減ってるし。それとメンバー紹介しないとな。シリカ後緊張しないでいいから。」
「は、はい。」
　と言いながらも緊張してるのは目に見えていた。
　食卓につき飯を食べ終えたあと
「んじゃ遅くなったけど自己紹介するか。えっとさっき連絡した通りビーストテイマーで３５層の迷いの森で知り合ったシリカだ。武器は短剣で今回の依頼者だ。」
「よろしくね。シリカちゃん。」
「は、はい。」
「んで俺のシリカの右から順番にアスナ、キリト、ケイタ、サチだ。もう一人アルゴもいるんだけどさっき仕事で抜けたのは知ってるよな。今のガーディアンはこれで全員だ。まぁ後からゆっくり話してくれていいからとりあえず報告からか俺からは長くなるか

ら後でだ。ケイタとりあえずマッピング状況を教えてほしい。」
「えっと、今の所役6割程度だと思います。迷宮区を発見したんですが……」
と報告を聞いていく。あまり変わりのない展開が続き
「じゃあ最後に俺だな。……まぁシリカとは成り行きでパーティー組むようになった。まぁ、とりあえずはまず一つ連絡にもあった通りシリカのために47層のダンジョンにさいてあるプネウマの花を取りに行くことになった。護衛は俺だけでやろうと思うんだがどうだ？」
「うん。レベルも装備品も問題ないとは思うんだけど……サチが。」
「とは言っても明日は攻略の日だろ。ダンジョンの推奨レベル的には安全圏だからなぁ。」
「う～。そうだけど……」
サチが膨れている。
「……仕方ないアスナ頼めるか？」
「えっ？私？」
「……あそこのモンスターってちょっとあれだろ？最悪女子の方が。」
「……うん。そうだね。」
するとすぐに納得する

「それならケイタとキリトは隠密スキルが高かったはずだからついて来てくれないか。
……あのグループが接触する可能性が高いし。」
「あのグループってなんですか？」
「……そのことから。説明しようか。じつは」
と俺の口から離される言葉にシリカは驚愕してしまった

シリカ

「……む～カズトのケチ。」
と剥れている千代を前に苦笑しながら俺は千代の愚痴に付き合っていた。
とはいうもののシリカの件は一件というか千代の一人だけ納得してないことで終わった。
「でも本当にそのロザリアさんだったよね。女の人らしいけど…」
「……まぁ、確かに見た感じは少し強めのギャルって感じだけども、まあ確認しだいかな。見た目が外見は完全に一致してるし。ほとんど確定だと思う。」
しかし言い方や身なりなんてここじゃすぐ変えられる
「でも、たとえそういう奴をアスナもカズも許さない奴ってよく分かってるだろ。……本当の命がかかってるしな。」
「……そうだけど。でも。」
「まぁ、俺も休みたかったけど、さすがに状況が最悪に近いからな。」
「そんなに？」
「シリカがパーティー組んでから約3週間。そこから考えるともうそろそろ狙い目だ

ろ。防具も何も買っていなくてスピリッツタガーを買い換える為に資金も貯めてたらしいからな。」
　シリカから聞いた話だと
「それでも……」
　と不安そうにただ俺を見ている千代に
「死なないよ。」
　その一言だけいう
「絶対死ねない。千代を残してなんか死ねない。……絶対死なないし死ねないよ。まぁ危険な目にはこのゲームから脱出するまでは無茶も危険な目に会うことがあってもそれでも生きるから。絶対この家に帰るから。」
「……うん。」
　と少しだけ寂しそうにしている千代に少しだけ笑ってしまう。
　サチと付き合ってからもうプレイヤーネームで呼ぶことはなくなりもう千代と呼ぶことが多くなった。
　そして少し心配性がひどくなった
　不安で仕方ないのだろう。昨日も今日も俺が圏外に行くことを拒み。ただをこねた子供みたいになってしまう。

まぁ、あの件と自分の自業自得なんだけど
「それに……ちょっと孤児院のこと思い出してな。」
「……えっ？」
「シリカと同じくらいの女の子って結構いるんだよ。普通男子とかが多いんだけど……こっちは女子の方が多かった。だからかなぁ。なんか嫌な気持ちになるのは。」
「……」
「孤児院の奴に仲がよかった奴なんか一人も居ないけどそれでも、やっぱ気になるさ。こんなゲームに巻き込まれて戦ってるんだもん。怖いわけがない。サチだって分かるだろ。」
「……そうだね。」
……だからかもしれない
本当なら見過ごすことだってできた。
ただ千代と同じ立場の女の子を見過ごすわけにはいかない。
「……寝よっか。千代。」
「うん。」
と俺たちは寝室へと向かった。
「はぁ。」

「……どうしたんですか？ユニバースさん。」
「別になんでもないよ。」
　そしてもう一回ため息をつく。俺たちが待ち合わせ場所につくと少し二人とも集中力が欠けていた。
　まぁ、予想はしてたけど
「そういや、アスナ。キリトとデートにいくとか言ってた奴どうなったんだ？」
「えっ？」
「お前リズが言ってたぞウキウキで黒の戦士様とデートしに行ったらしいじゃねーか。」
「ちょっとリズ～!!」
　するとアスナが大声をあげる
「いや～アスナさんやりますなぁ～。しかも手作り弁当持参で。第一層の時キリトからもらったクリーム付きコッペパンを一生懸命にほうばっていた時とは大違いですな。」
「ちょっと!!あれは、お腹が空いてて。」
「それに一時的に鬼女って言われてたのは。」
「それは……その。」
「プッ」
　するとシリカが笑い出す。悪いけどアスナには犠牲になってもらった。

「緊張は抜けたか？一応昨日のことは一旦忘れろって言っても無理だけどそれでもシリカにとったら上層だ。アスナの防具を借りてるにしろＨＰは俺とアスナより低いんだ。目の前の敵に集中しなければ、死ぬぞ。」
「は、はい。」
「アスナももっと力を抜け。そうしないとお前いつもの速さがなくなるぞ。」
「えっ。うん。」
「アスナもシリカも一応安全圏にいるけど圏外ってことを忘れんな。一歩クリがでたら引いてポーションで回復、そしてアスナはシリカがあのツタや触手で捕まった時の対処よろしく。俺じゃアレは対処しづらいから。」
「……フフッ」
　するとアスナが笑い始める
「どうしたんだよ。アスナ。」
「ううん。やっぱりユニバースくんだって思って。」
「なんだよ。」
「別に～じゃあ攻略始めますか。」
「まぁ、いいけどさ。一応最終は思い出の丘攻略。運が悪ければ例の案件に突っ込むってことで。」

すると二人は頷く。まぁ分かっていることを再確認してるだけなんだが。
「んじゃ、行くか。転移フローリア。」
すると目の前が青い光に包まれそして花畑が見える
「……うわぁ～」
するとシリカが驚いたようにその階層を見回す。
「フローリアはフィールドも一面花畑で観光スポットとして人気なんだよ。まぁデートスポットとしてもかなり有名らしい。だから男女ペアが多いだろ？」
「へぇ～そうなんだ。」
するとアスナが驚く。
「あれ？意外か？」
「だって。エリアのアレを見たら…」
「……まぁそうだけどさ。」
「アレってなんですか？」
「さっき言ってたモンスター。食虫植物をモデルに作られてる。あれ、軽装備だったら簡単に捕縛されるんだよなぁ。」
かなり気持ち悪いモンスタがここには多い。しかし弱く経験値も多めだからアリ塚が空いてなかったらここでレベ上げをしていた。

すると嫌そうにシリカとアスナが俺の方を見る
「なんだよ。」
「いや。なんでユニバースさんはそんなに平気そうなんですか？」
「うん？男子ってそういうもんじゃないか？あんまり気持ち悪いと思うことがないよな。男子って案外そういうとこあるし。基本男子と女子で価値観が違うしな。例えば美容とかそうだろ？化粧を女性はするけど男子はそう言ったことを気にしないし気にならない。まぁ肌年齢とかだってだからどうしたって思うしな。サチが時々話すけど俺にはよくわからないし、逆に女子とかはラジコンカーとかガンプラとかやってる人は男子に比べるとやっぱり割合が減っているだろ？」
「つまり、どういうことですか？」
「価値観の違いだよ。例えば俺らのギルドってよそからみたら最強ギルドとか色々言われているけど、実際のところは俺たちにそんなつもりはない。ってかトラブルに巻き込まれるのが見え見えだからな。だから最強ギルドは俺たちじゃない。それに。」
俺は息を吐き
「俺はそんなことを目指すためにこのギルドを作ってはいない。」

死の恐怖

「ぎゃ、ぎゃあああああ。」
「……まぁそうなるよな。」
歩き出して数分最初のモンスターと出くわしたのだが案の外シリカが悲鳴をあげる
「…ユニバースくん久しぶりに見るけど…」
「あぁ、そうとう面白いよなここのモンスター。」
「「面白くないわよ。（です）」」
と二人が奇声をあげる。こいつらこういったところをみると笑えるよなぁ。
「でもそいつクソ弱いぞ。それよりも気持ち悪いやつだっているし。」
「きえー。」
「……アスナＧＯ。」
すると閃光の名にふさわしい速さでアスナがモンスターへと向かっていく。アスナは攻略組軽装備グループの中でキリトに次ぐ強者だし時々リニアーの速さでは俺とキリトも目が追えない時がある
もちろん今回もその強さを遺憾なく発揮し簡単に勝つことができた

「シリカ大丈夫か？」
「はい大丈夫です。」
「アスナもお疲れ。」
「うん。」
　と軽くハイタッチをする。これは元々月夜の黒猫団から引き継いだ一つでもあった。
「なんかこうするのも久しぶりだな。俺アスナと二人でパーティー組んだことってなかっただろ？」
「うん。キリトくんとはよく組むけどね。」
「てかキリトはバランス型だから組みやすいんだよ。アタッカー、壁役なんでもそこなくこなすから。てか、このギルドじゃなければ俺はアタッカーに回ってるし。」
　ガーディアンは良くも悪くも個のチーム
　むっちゃけ戦略も必要ない。自分の仕事をこなすだけで基本はいい
「でもユニバースくん。」
「あぁ。分かっているさ。」
　アスナの言葉を区切る。俺もアスナも言いたいことは同じだろう
「シリ「分かってます。」
　するとシリカは少し自分を責めているように感じる

「……自覚があるんならそれでいいさ。」
　俺が言うとシリカは頷く。悔しさや後悔が滲みこんでいる
「さっきもいったけど圏外だ。一応平原で少し丘があるけど見晴らしがいいぶんこっちも的に見つかりやすい。だから戦闘では逃げることは得策ではない。」
「うん。そうだね。ってことは」
「……あんま手出しはしないがヘイト俺が稼いでその隙に倒すか。アスナは基本探索スキルで見張りお願い。」
「うん。」
「本装備じゃないけどこれでいいか。サチに言ったら泣かれるだろうけど」
「そこは怒られるんじゃなくて泣かれるんだね。」
　アスナが呆れたようにいうけど
「……それが一番俺には堪えるんだよ。あいつ怒ることはないけどその分泣き出すから。」
「そういえばユニバースさん？」
「うん？」
「……昨日から気になっていたんですけどユニバースさんとって前に何かあったんですか？」

シリカの言葉に少し目を見開いてしまう。すると焦り始めるシリカ。
「いえ。言いづらかったらいいんですが。」
「別にいいさ。まぁ暗い話になるけどな。」
俺は苦笑する
「半年前本当は俺とアスナとキリトそしてアルゴの４人だけのギルドだったんだよ。でも２５層で軍の奴らが後退してその後にアスナとキリトがストーカーの被害にあって。」
「す、ストーカーですか?」
シリカは驚くけど
「うん。私は最近でも隠蔽スキルを使ったストーカー被害を受けてるけど……」
「街中でもスキルを多用した、ストーキング行為が増えてきてるんだよ。ってか俺らも最初は気づかなかったんだよな。キリトの勘とスキルがなければ全く気づかないほどだったけどな。あの時はアスナが人間不信ぎみになるから大変だったんだよ。」
あの時は本当に苦労した。あの後下層での注意書きと対策などを色々練っていたのもある
「……このＳＡＯはスキルを使えば並大抵の犯罪行為ができる。特に隠密スキルと追跡スキルの組み合わせがあれば簡単にストーキング行為に持ち込める。それに聞き耳ス

キルも熟練度が高いと壁越しでも人の会話が聞けるようになる。……いわゆるここは無法地帯なんだよ。特に男が多いＳＡＯの中で女性プレイヤーが二人もいるガーディアンは特に狙われやすい。俺たちは一応攻略組最前線にいるからな。サチもあぁ言う被害多かったらしいし。」

「うん。それにストーカー行為での行きすぎた勧誘も最近多発してるらしいからね。それも最近じゃオレンジギルドへの勧誘も多発してるみたいだよ。」

「……って話逸れたな。まぁ、そういったことの対処、下層の情報提供、また少しだけ商業ギルドの創立するための人材育成や物費や資材の援助など俺は睡眠時間や休みの日まで削って行っていたんだよ。それでいつの日だったかな？キリトに無理やり休むように言われてちょうどキリトがやっておきたいって言っていたクエストに出たのがきっかけだった。そしたらさ前衛職が一人しかいない五人組のパーティーとであったんだよ。」

少しだけ懐かしくなる。そうして話をし始める。なんとか敵を対処しながらも途切れつつゆっくりと話した

月夜の黒猫団のメンバーのこと

サチとケイタが元々はそこのメンバーだったこと

サチの逃亡やギルドハウスのこと

アスナやキリトすら知らないことを話していた
そしてそのギルドの壊滅から俺の暴走まで全てを話した
ここまで話すことなんて本当に初めてだった。
「……そんなことがあったんですか？」
「……まぁな。唯一連絡を取り合っていたのはアルゴくらいか。下層の情報提供と支援だけは続けてたからな。」
そこだけは前と変わらなかった。下層の支援だけは続けないといけなかったのだ。
「もう二度と同じ真似は犯したくなかったからな。情報は全部下層に伝えてたさ。サチはさすがにモンスター情報は伝えられないだろうからな。まぁでもさやっぱ人の命って重いんだよな。俺は待ってる人がいないからいいんだけどサチにだってアスナにだってシリカにも家族がいるだろ？」
「……」
「ぶっちゃけ不安なんだよ。ギルドの団長は俺にはかなり重いんだ。」
俺は少しだけため息をつく
「……結局蘇生アイテムも今も俺が持ってるけどギルメン以外は使う気ないしせめてクラインやエギルぐらいだろうな。……友達が死ぬのは本当に怖いから。」

犯罪者ギルド

思い出の丘に入ると思っていた以上にエンカウント率が高くなった
俺も油断せず盾ではなくアタッカーとして、前線に立つ
元々レベルが一番高い俺のことだから一発ソードスキルを放つと一撃でモンスターはＨＰを削れる
「……これで終わりっと。」
俺がとどめを出すとレベルアップのファンファーレが流れる
「あっ！私レベル上がった。」
「おっ。おめでとうさん。」
アスナに一言告げる。どうやらあっちも戦闘が終わったらしい。
「シリカは？」
「うん。大丈夫そうかな。元々腕は悪いわけじゃないから。」
アスナがそういうと同時にレベルアップのファンファーレが流れる
「シリカちゃんもレベル上がったんだ。おめでとう。」
「おめでとさん。」

「あ、ありがとうございます。」
　とシリカは少しだけたじたじとしていた。
「ん？どうした？」
「えっと。もう8レベルもレベルが上がっているのですけど……これって。」
　すると俺とアスナは顔を見合わせる
「あれ？俺のユニークスキルって下層に伝えてなかったか？」
「えっ？ユニバースさんってユニーク持ちなんですか？」
「あぁ、エクストラスキル急成長。んでもう一つはエクストラスキル状態異常無効化。こっちはちょっと微妙だけど今は俺だけ。発動条件がまだ確定してないけど……」
「……知りませんでした。」
　するとシリカはキョトンとしている
「アスナ。」
「多分聖竜連合が情報規制しているんだと思う。」
「……やっぱりそうなるよなぁ。」
　と俺はため息をつく
「中層はやっぱり聖竜連合の方が知名度高いな。もうそろそろ管理職をスカウトしようと思ってたのに。」

「そういえば言ってたね。」
「サチの負担が重すぎるからな。俺今手伝っているけど、あいつ体力があるわけじゃないし。」
「えっ？中層からスカウトするんですか？」
　シリカは驚くが
「当たり前だろ下層の奴に任しておけるほどの人脈が俺たちのギルドにはないからな。」
「……まぁ、商業ギルドから勧められた人を雇うしかないからね。」
「……それに人選間違えたらまたアスナがなぁ。」
「な、なんか大変なんですね。」
「人間関係ってそんなもんだろ。一応俺らって中高生ばっかだから舐められやすいし。」
　上下関係は必ず存在しているしな
「……はぁ、本当人間関係ほど面倒なことはないな。」
「あはははは。」
　と苦笑しているアスナに少しだけ小突く
「今前線はお前らに任せているんだから頼むぞ。ケイタもやっぱりプレッシャー感じることの方が多いんだから。」
　あいつも一人で溜め込むことが多いからなぁ

そういいながら楽々丘の頂上までたどり着く
「……ほらついたぞ。」
俺が頂上に着いたことを言うとお花畑の広がった綺麗な景色が広がっていた
「うわぁ。」
とシリカは嬉しそうにしているけどキリトからの連絡に俺は目をひそめる。阻止ってシリカには聞かれないようにして
「……キリトから連絡。反応ありだ。」
その一言にアスナはビクッと反応する。
「……頼むけどシリカのこと。」
「ええ、作戦通りに動くわね。」
俺たち真剣な表情に変わる
……さてとこっちも準備しとくか
「……どうしました?アスナさんユニバースさん?」
「なんでもないよシリカちゃん。」
隠す気がないのかアスナはどうみても慌てているように見える
……お前絶対嘘つけないだろ
騙せるとしたらキリトぐらいしかいないぞ

「……なんか失礼なこと考えてないユニバースくん。」
「別に～。」
　俺はそっぽを向くと
「それでシリカあったか？」
「あっ、それがないんですよ!!」
「そんなはずは……」
　と思ってその丘をみると
　……なるほどな
「シリカあれ。」
　俺が指を差す先には小さな双葉がある
　すると双葉が伸徐々に大きく伸びていき
「うわぁ。」
　笑顔になるシリカに笑ってしまう
『空にい。これ一緒にやろ。』
　……そういえば、孤児院で唯一俺に構っていたやついたな
　……もし現実世界に無事に戻ったならあいつと手合わせしてやるか
「……ユニバースくん？」

「……ん？」
「どこか懐かしそうだけど……」
「ちょっとな。」
　俺は苦笑してしまう。こいつらに隠し事できなさそうだな
「まぁ、リアルのことで色々な。」
「ふ～ん。」
「なんだよ。その顔。」
「別に～。」
「いや、どう見ても俺に知り合いなんていたんだって顔してたじゃねーか。」
「……なんでそんなこと分かるの？」
「付き合いならキリトの次に長いしな。それに孤児院の子だよ。まぁ、俺の自称弟子だ。弟子にした覚えないけど。」
　するとアスナは少しだけ苦笑する
「……なんかユニバースくんって苦労性なのかな？」
「……結構なトラブルメイカーなような気がする。」
　シリカがはしゃぐ中で淡々と話す俺とアスナに
　……やっぱ護衛に人選間違えたかな

そう思わざるを得なかった
目的の物を取り合え珍しくエンカウント率が低く小走りで街へと戻ると
「……シリカストップ。」
街の直前で立ち止まり俺はシリカとアスナを止める
「……えっどうしたんですか？」
「いいから、キリトケイタ出てきていいぞ。」
すると隠蔽スキルをとったキリトとケイタが出てくる
「えっ？」
「……どこだ？」
「そこの木の後ろだよ。」
「アスナシリカを連れてガード頼む。」
「……ええ。わかったわ。」
「おい。そっちも出てきたらどうだ？」
するとキリトがそういうと
役十人のくらいの人が現れる
……一応想定範囲だな
「あたいの隠蔽スキルを見破るなんて侮っていたかしら剣士さん。」

「アホか。前準備を済ませてきたんだよ。シリカの目的は俺たちにとったらついでだ……探したぜ。犯罪者ギルド《タイタンズハンド》のリーダーロザリアさん。」
俺が言うとギョッとするロザリア
「……そういえばそこの人は昨日すれ違ったっかしら?」
「あぁ、あんたとシリカと話している隙にな。ってかいいのか?そんなことしているとこのゲームはすぐにいなくなってしまうぞ。」
するとアスナとシリカは転移結晶で消えていく。
「……しまっ。」
「……さて、まぁまんまとおびき出せたな。まぁ。俺はあんたを捉えにきたんだけどさ。」
「……あんたやってくれたわね。」
ギリギリと歯ぎしりしながら俺を見るが
「悪いけどさ、そう言っている暇はないと思うけど。」
「えっ?」
キリトが言う頃には攻略組少数ギルドとソロプレイヤーのフルパーティーが村から出てくる
「…ナイスタイミング、クライン。」

「おう。さすがに我らの代表の頼みだしな。」
「……それでどうする？俺ら攻略組とお前らで潰し合うか？」
　すると全員が固まる
「なっ？嘘だろ。」
「ちょっと待て、キリトとアスナ？もしかして閃光と黒の剣士？」
　顔が青ざめていくシーフの男
「それじゃあケイタってあのガーディアンの団長か？」
「……ちょっと待ってよなんで、そんな人たちがこいつの。」
「盛り上がっているところすいませんが。ガーディアンの団長は俺じゃありませんよ。」
「は？何を言っているのよガーディアンは確か四人の少数ギルドでしょ？」
「……元々は三人、そして1に一時脱退して二人入って、そして元々団長だった俺が復帰させてもらったんだよ。」
　すると俺は元々の鎧に着替える
　一層からトレードマークになっている青い鎧と緑色の盾
　そして宣言する
「ギルドガーディアン団長、ユニバースだ。……投降してくれないか？一応全員に麻痺毒を与える短剣を配布したんだわ。一応投剣スキル持っている奴も数人いるしな。

……結晶アイテムで逃げられると思うなよ。」
と俺は緑色の液体を垂らした短剣を見せる。
すると首を項垂れる犯罪者ギルドに俺はポケットの中から回廊結晶を取り出し
「コリドーオープン」
俺はそれを開く
「……黒鉄宮に設定してある。……さっさと消えてくれると嬉しいんだけど。」
「……畜生。」
するとさすがにこの人数差とレベルには勝てないと思ったのか回廊結晶の中に入っている
しかし」ロザリアだけは別だった
転移結晶を取り出したそうとしたところをキリトが押さえ込む
「ひぃ。」
「……キリト頼むわ。最悪オレンジになっても復旧クエに行くから別にいい。ただ殺すなよ。」
「分かっているさ。」
と掴み取りコリドーに投げ込む。どうやらカルマ復興クエはしないでいいらしい。
「お疲れ様。みんなも悪い。こっちの都合で攻略抜けてくれてサンキューな。」

「別にどってことないことよ。」
するとクラインを皮切りに他のメンバーも頷く
本当にお人好しの集まりだなぁ
「ケイタも悪いな。攻略は今任せてあるのに。」
「いいよ。全然。僕も人を殺すやつだけは絶対に許せないし。」
穏やかな口調だが怒りを持っている
……そっか、ケイタもまだ
俺は少しだけため息を吐く
「んじゃ今日のところは解散。」
と俺が言うとぞろぞろと別れて行く。
俺はサチにメッセージを送るとすぐに連絡がくる

家で待ってる。

「……はぁ。キリト。サチから呼ばれたから家戻ってからギルドハウスに向かうわ。」
「……分かった。」
「すいません。サチが。」

ケイタは悪そうにしているが
「別にいい。……これだけは俺に背を負わせてほしいから。」
あの時のことがあるから今がある
でも俺ももう少し限界なのかなぁ。
でも、もう疲れきってしまっている
多分それはケイタも同じ
「ケイタ。明日から1週間休もうか。」
「……」
すると驚いたようにしていたが
「……そうですね。僕もちょっと疲れました。」
「一週間しか与えられなくて悪いけどな……キリトも悪い。アスナに一週間休みだと伝えておいてくれ。」
「あぁ。しかし意外だな。急に長期的な休暇なんて。」
「……ちょっとな。」
俺は濁していたが少しだけ分かっていた
これからの方針をしっかりこの休暇でまとめないとな

入団条件

「ただいま。」
　俺がホームに帰るとバタバタと足音が聞こえてくる
「空太おかえり～。」
「おっと。」
　といい抱きついてくる千代に俺は苦笑する
「あぁ。ただいま。」
　俺は支えながら安堵をつく
「……ってか離れて、離れて、この後ギルドハウス行かないと行けないから。」
「む～ケチ。」
　すると聞き分けがよく離れるサチに少しホッとする
　最近暗かったからな。当分の間は大丈夫だろう
「そういえばキリトとケイタは？」
「キリトはギルドハウス。ケイタはホームに先に帰らせた。……まぁ、身体より精神的に参ってたからな。当分の間は休むことになりそうだな。」

「そうなんだ。」
「ギルドガーディアンは暫くの間休み。アルゴにも休暇すると商人ギルドにも言ったし、ヒースクリフにもボス攻略があっても休むって連絡済みだ。」
「珍しいね。ボス攻略は休んだことはなかったのに。」
「ケイタが少し限界ぽいからな。……休ませるようにしたんだよ。」
「……」
「一応俺も付き合いだけは長いからな。でもケイタは普段そんなとこ見せないから余計に気をかけているんだよ。」
「……そっか。」
「もう、あんな思いはしたくないしな。」
俺とサチそしてケイタは一緒にパーティーを組んだ仲間だった
そんなとこどうしても譲れないことがある
「……それと犯罪ギルドの殲滅は大手ギルドに任せることになったよ。どうやらヒースクリフにも内緒にしていたらしいし、……俺たちみたいな少数ギルドだけでの解決は無理だから。」
「……そっか。」
「あぁ、俺たちも一週間は何もしない。アルゴも連絡したら弟子に一任するっていって

たし完全に休みになる。」
「アルゴさんも？」
「一応前線にはでてないけどな。まぁあいつの頑張りでこのギルドは存続しているもんだしな。」
俺は少しだけ苦笑してしまう
情報というのはかなり重要のものであり、それに対して一番オレンジギルドに対しても狙われやすいものである。
……まぁ、俺たちがバックについていることもありアルゴは基本的にうまくいっているだけども
まぁアルゴから言い出してきたことだし別にいいんだが
「……はぁ、本当逃げたいな。全部投げ出してしまいたい。」
「でも、逃げ出すわけにはいかないんでしょ。」
「……当然。でも、当分の間はゆっくりしたいなぁ。とりあえず今日の報告したら全員で休暇になるし。」
「まぁ、キリトとケイタはクエストだろうけど。」
…まぁ圏外での単独行動は禁止しているからな。心配はないとは思うけど。
「んじゃもう一度出かけてくるか。」

「…あっ。私も行くよ。私もシリカちゃんに会いたいし。」
「了解。んじゃ行くか。」
と俺も私服に装備を切り替え行く準備を簡潔に済ませた。
ギルドハウスに着くと
「なんでそんな危険な真似をしたの。」
と怒っているアスナと正座しているキリトの姿そしてあわあわしているシリカとフェアリードラゴンの姿があった。
「……どうしたの?」
サチが俺の方を見るが俺は首を振る
わかるわけないだろ
するとアスナがこっちを見ると
「あっ。ユニバースくんサチ来たの?」
「あ、あぁ。」
「ちょっとキリトくんに話しあるからちょっと話してくるね?」
「……」
キリトが助けを求めている。まぁ、今日の討伐戦で頑張ってくれたし
「まぁ、説教は後にしてからやってくれ。俺も今日は少し休みたいしな。とりあえず今

後の予定についても話しておきたいし。」
　時間延ばすくらいならやってやるか
「……まぁ、ユニバースくんが言うなら。」
「あぁ。それでピナは生き返ったか？」
「は、はい。この通りです。」
「ピュゥ。」
　すると羽ばたいてきたピナがパタパタと飛び俺の頭に乗っかってくる。
　可愛いとサチがいうと苦笑してしまう
「ちょっとピナ。」
「別にいい。まぁ、ガセじゃなくてよかったよ。俺も蘇生できると言う情報とフラグ立てはしただけで蘇生アイテムで蘇生した人を見たのは初めてだったからな。」
　そこは少しだけホッとする
「アスナとキリトはさっきキリトに伝えた通り明日から一週間の休暇。ボス攻略にも不参加すること。」
「分かったけど、ボス攻略にも不参加なの？」
「あぁ、ってか今までが異常なんだよ。毎回のようにボス参加することが普通みたいになっていたけど、でも俺の休養とケイタが限界の時点で過半数がボス攻略に出れないん

だ。」
「……まぁ、ラストアタックボーナスの調整も兼ねているんだろうな。」
キリトの言った言葉に頷く
「正直俺らは攻略組最強ギルドと呼ばれているけど実際のところ人材は足りてないし金銭的な余裕もない。しかしあまり人数を増やしすぎるのも良くないだろうし。気心しれている仲間じゃないと背中や前を任せるのは少し嫌だろ？できれば最大人数は後三人。戦闘職二人に支援を含めた実質三人を勧誘することにした。」
「……それは決定事項？」
「…いや、予定だけ。ってか多分これ以上に減るとは思う。多分少し財政が。」
「ポーションや結晶のことを考えると少し厳しいの。多分後一ヶ月ぐらいでギルド資金がつきそう。」
「……まじ？」
キリトが焦ったようにすると
「……最近使い道が荒かったからな。今残り２００ｋぐらいなんだよ。」
「……」
絶句している二人に俺は苦笑してしまう
「結晶アイテムは俺の分のやつ除いても、３００ｋは見積もりはかかるんだよ。まぁ、滅

多に使わないけどさ。」
「その前になんでそこまでギルド資金が。」
「オレンジギルド対策にリズの知り合いの防具屋に大量に対人専用の防具をを集めてもらったんだよ。防具の料金がフルだとお金が掛かるし。」
「……あっ!!」
　これは前から決議した中で俺たちが決めた唯一の支援策だった
「だから節約か私たちの休みの日を増やすか迷っていたんだけど。」
「丁度いいところにギルドの休暇命令も出せたし、なによりも精神的に疲れたしなぁ。どっちにしろ都合がよかったよ。」
　と言いながら俺は少しだけ不安を覚えていたが首をふる
「んじゃとりあえず休めよ。ギルドハウスに入ることも禁止するからな。」
「ちょっとマジか?」
「マジだよ。というか俺がそうしないとマジで俺が死ぬから。」
「どういうことですか?」
「……最近寝て起きたらいつの間にかギルドハウスに行って書類仕事をいつの間にかやっているんだよ。」
「……それ末期症状だな。」

社畜体質が身についてきていると言ってください
「それに流石に休みたいです。というより書類仕事から逃げたい。文字や仕事から抜け出してゆっくりしたい。」
「そういえば、休暇宣言してから結局どれくらい休んだの？」
「……二週間くらいかな？」
「まぁ、それくらいだろうな。ホーム買ってから内装整えたらすぐにアスナの件があったし。」
千代に頷くと
「そういえばアスナさんも何かあったんですよね？私と同じみたいな。」
「あぁ。ストーカーと引き抜きだよ。家のギルドは正直攻略組でそれにかなり強いギルドだからな。それに小規模っていうのが。」
「まぁ、小規模とはいえど支援を目的に活動しているからね。そういえば孤児院に寄付してたよね？あれって今でも続けているのか？」
「俺個人は続けているな。格安で食材を売るようにしている。」
「お前アルゴには聞いてたけどちゃっかり支援だけは続けていたんだな。」
「……まぁ、それしか生き甲斐がなかったしな。」
そんなことを呟くと上に寝ていたピナがきゅると鳴き俺の頭の周りを周る

「……なんかピナに慰められているんだけど。」
「ちょ、ちょっとピナ。」
「きゅる！きゅるるぅ」
　と主人から逃げるピナが少しだけおかしくなって笑ってしまう。
　それにつられるようにアスナやキリト、千代まで笑ってしまう
「……はぁ、まぁいっか。一旦忘れよ。」
　ぽりぽりと頭を掻くと
「んじゃ、シリカもまたな。今度はリアルで。」
「きゅる！」
　とすると急にピナがくっつきだす
「ちょっとピナ。」
「きゅるる。」
「ユニバース。お前懐かれたな。」
「……そだな。」
「……シリカちゃんさえ良ければ私たちのギルド入らない？」
　するとアスナがそんなことを言い出す
「アスナ？マジか。」

「私たちのギルドに足りないところの一つ忘れたの？」
「……まぁ、確かに遊撃はアスナ以外に一人欲しかったところだし、植物系モンスターじゃなければちゃんと戦えるしな。」
　最後は結構狩れていたし確かに素質はあるんだけど
「キリトはどう思う？」
「俺は賛成かな。」
「あれ。キリトも賛成なんだ。私もギルド資産的に厳しいけど賛成かな。安全のためだと思えば。」
「あ～シリカはどうだ？俺たち」
「入れるなら入りたいです。」
　……まぁ、そういうんだったら
「ケイタの承認を得たら別にいいと思う。正直今のままじゃ人数的に厳しいし。」
「それじゃあ。」
「でも、ユニバースくん参加条件は？」
「あぁ、大丈夫。満たしてる。てかそれはみんなも分かっているんじゃないか？」
　すると全員が頷き笑う
　ギルド参加条件は自分だけではなく何かを守ろうとする心がけること

俺は笑ってそしてシリカに笑いかける

多分俺の勘が正しければ正しく力を使ってくれるはずだ

そしてケイタにメッセを送るとすぐさま許可がおりシリカはガーディアンの一員になった

釣り

……ふぁ～

シリカの騒動から二ヶ月がたとうとしていた

シリカは下層をソロでコツコツとレベル上げをしていたので結果的には未だに攻略組予備軍として活動していて俺と千代は相変わらずの書類仕事に日々苦戦をしているところだった

そんなある日の休日

「暇ですね。」

「…あぁ暇だな。」

俺とケイタは釣りをしながらのんびりしていた

すると竿が引き俺がそれを見越して竿を上げる

魚との掛け合いも少しだけ楽しみながら引き上げると魚が一匹釣れる

「今日の晩飯の確保もおわったな。」

「本当にすぐに釣れますね。」

「まぁコンプリートしているしな。今日はサチがリズとシリカと女子会をやるとか言っ

て俺の家占拠しているし。これからどうする？」
「武器新調しに行きませんか？僕の武器５２層のラストアタックボーナス以降変えてないんですよ。」
「……別にいいけどリズのとこだろ。店主がうちに来ているのに行って意味あるか？」
結婚した後よくリズとシリカは遊びに来てほとんどの確率で俺は追い出される
「そっか。確かにそうですね。」
とほんやかというのに対して俺は頭を掻く
「そっちはどうだ？俺は知らないけど年上の人と付き合い始めたんだろ？」
ケイタは二ヶ月前に１０歳年上の人から告白され付き合い始めたらしい
いや、まさか年下から人気とは聞いてはいたが年上好きとは普通に驚き数分の間口が塞がらなくなった
「はい。上手くはいっていると思いますけど。もし上手く行かなかったら相談しにいっていいですか？」
「いや。別にいいけどさ。こういうのって普通逆だろ。」
俺はため息を吐く
「でも、サチと付き合っているんですよね？それも結婚もしてますし。」
「といっても、付き合っているとはいえ未だに進展ないんだよなぁ。仕事ばっかりで休

日も女子会ばっかか仕事ばっかなんだが。買い物行くときに手を繋ぐくらいか。」
「ピュアですね。」
　とケイタが言うが
「俺もサチも恋愛に関してはほとんど知識がないしな。どうしたらいいのかわからん。」
　と言いながら竿を投げるとぽちゃんと音が聞こえる
「それになんかこの世界ではそういうのはなるべく避けたいんだよ。なんか、そんなことをしたら消えてなくなっちゃいそうで。」
「あんがい小心者なんですか？」
「仕方ないだろ。俺のことをちゃんと見てくれる人なんて滅多にいなかったんだし。っと。」
　魚が掛かり上手く合わせるとそしてリールを巻く
「よっと。」
「手慣れてますね。」
「釣りスキルカンストだしなっと。」
　するとそこには４０ｃｍほどの魚が釣れるとアイテムボックスに自動収入される
「といってもこれでギルド財政潤ったしなぁ。Ｓ級食材発光イカが釣れたとき本当に焦ったしな。」

「あれってコンプリートした人しか釣れないんですよね？」
「あぁ。てか釣りスキルは結構コンプしている奴多いし、なんか上層の餌を使わないと取れないからかなり高いけどな。今や一匹１Ｍコルだもんな。あのとき取れて正解だったな。」
「あの時そんな創価だったんですか？」
「いや。あれは情報を商人ギルドに売ったんだよ。イカは全部活け造りにして食べただろ？」
「それで１０Ｍを稼ぐって凄いですよね。」
　まぁ色々あったしな。これでも格安値でもある
「といっても利益とかは今は商人ギルドが損をしているが利益は数倍にも及ぶらしいし、マグロ漁業って感じらしいぞ。でも漁獲団体にルールを整備させて軍のシンカーに仕事を依頼してるし、それに利益を使った孤児院の寄付もお願いしている。」
「……それって大丈夫なんでしょうか？」
「シンカーとユリエールは安全だよ。元々ＭＭＯｔｏｄａｙを書いていた人だし。まぁ問題なのはキバオウの派閥だけど、それは抑止力を使っているし大丈夫だろ。」
　団長をやっているとときに強権を使わなければならない時があるしな
「んで本題に入ろうか。」

こんなことでケイタは俺を見ると俺はあるデータを渡す
ケイタはそれを見ると気づくはずだ
元々９８７名の名前が書かれていた生命の碑が一人増えていたこと
そしてその生命の碑が一人増えていたのがヒースクリフだったこと
「これって。本当ですか？」
「本当だよ。元々マークはしてたんだが……いや本当に少しアルゴのこと舐めてたわ。」
「……やっかいですね。」
「そう言うレベルじゃないさ。生命の碑でこれはかなりまずいさ。」
　というのは生命の碑のリストを記録していたそうだ。いやそれって結構やばい情報だろ。
「……どうしますか？」
「今やっても互角で戦えるチームでさえほとんどいないんだ。当分の間は見逃すしかないだろ。……すいません。また頼ることになります。」
「まぁ、ユニバースならそういうと思ったよ。頼りになるかは分からないけど。」
「頼りになりますよ。俺相談しようにも相談できませんし。アルゴもさすがにこの情報は販売規制をかけるらしい。さすがにあの男を使わないと俺たちは厳しくなるだろうしな。」

「……どれくらいになったら挑めそうですか？」
　ケイタの問いに
「三つ目のハーフポイント終了時までは確実に無理。俺たちだけでレベルを上げてもあいつは多分ソードスキルを掌握しているだろ？……たとえそれがユニークであってもな。」
「つまりはしばらくはそのままということですか？」
「……対抗するすべがないんだからしかたないだろ。今の前線は６０。ラスボスは１００層。最悪俺以外の攻撃は防具の防御力で飛ばされるぞ。」
「……それ無理ゲーですよね。」
「無理ゲーだからこそ耐えなくちゃいけないんだよ今無理に攻めたところで負けるのは見えているしな。神聖剣にも対抗できる力を手に入れないとな。……まぁ完全に俺らは大規模ギルドからフロアボス会議で対立したからな。」
　前回の攻略会議で俺らの少数ギルドと大型ギルドが対立し、少数ギルド代表の俺と血盟騎士団代表のコドフリーとディエルをすることとなった。俺はディエルになるとソードスキルよりＰＳを優先するので基本的にソードスキルを使わずに実際の剣捌きや剣道の心得で勝負するのだが……それが悪かったんだろう。
　舐めプしていると言われそれも圧倒的な実力差を見せつけ勝った。

ソードスキルとはあらかじめ設定された動きをするので避けるのは避けやすく空いた隙間にダメージを与えるのは俺の得意技でキリト曰く俺にとったらソードスキルはおまけらしい。

いや確かにそうなんだけどさ

「てかソードスキルに頼り過ぎなんだよ。対人戦においてソードスキルはただわざと速度を早くするための道具でしかないしな。」

「そう言えるのはユニバースさんだけだと思いますが。」

と呆れているが

最近のモンスターはどこかで戦ったような剣筋をしているんだよな。なんかアルゴリズムがおかしいと感じているけど。自然と剣筋が見えるっていうか。

「……まぁいいや。とりあえず作戦は地道に考えないとなそれまではこうやってのんびりしながら考えるか。明らかにゆっくり少しずつ考えないといけないし。目標は７５層での討伐だな。」

「そうですね。これ以上死者を出す訳にもいきませんし。」

「……そだな。まぁあいつらにいつ伝えるかも鍵だろうな。」

俺はぽりぽりと頭を掻く。

「それも考えておいてくださいね。団長。」

「……はい。」

俺はため息を吐くとクスクスと笑うケイタにもう一度ため息を吐く

どうやら俺の困難はこれからも続くと思うとため息を吐くしかなかった

そして思った通りその日の晩俺たちはデートをしていたキリトとアスナによってトラブルに巻き込まれる事になる

圏内事件①

「はぁ？圏内でＨＰが０になった？」
　俺がキリトから俺の家で受けた報告は思いもしないことだった
「それはディエルとかじゃないんですか？」
　シリカの問いにキリトが首を横に振り。俺が言葉をつなぐ
「いや。あの通りは俺も行ったことはあるけど勝利宣言を誰も見ないということはありえないな。あそこ最前線付近で美味しいＮＰＣレストランが多いことで有名なんだよ。前千代と行った時も結構混んでたよな。」
「うん。あそこで見失うなんて少し考えにくいかな？でも圏内でＰＫなんて。」
　千代の言葉に少しだけ考え
「詳しく聞かせてもらうか？」
　するとキリトとアスナは話始める。服装、時間、そしてエギルとの会合に全部聞き取ると数点おかしなところを感じる
「……」
　俺は考え推理する

「…んで、その罪の荊って武器はどこだ？」
「えっと私のウインドウに入っているわよ。」
　と手渡しされると俺はそれを受け取ると
　槍を見つめる剣先に手を触れてみると軽く障壁が発生する
「この槍にも特別な仕掛けだってないし、この多分あまり大した性能はないらしい。」
「う～ん。とはいって圏内壁は発動しているし、圏内に飛び込むと貫通ダメージも状態異常も無効化されるからな。」
「えっ？それって本当なの？」
「状態回復無効化スキルの熟練度を上げるには毒付きの短剣を刺してやるのが一番てっとり早いしな。その時の貫通ダメージも刺した時の感触はのこるけどな。」
「もしかしてやったことがあるの？」
「……」
　無言を貫く。多分感覚的に怒られる奴だし
「まぁ、つまり状態異常も貫通ダメージも圏内に入ったら停止するんだよ。ディエルに以外においてダメージは与えられないはずだ。」
「それは分かったけどそれじゃあどうやってダメージを与えたの？」
「……ついでに言うけど落下ダメージと縄を首に絞めてもダメージはゼロだからな。圏

内コード天井まで繋がっているからな。例え天井に転移してもダメージはなく不快感を残すくらいだし。」
「「「「へぇ～～」」」」
　すると全員がこっちを向くと
「よく、知ってますねそんなこと。」
「まぁな、それと武器の名前から考えたら復讐かな？」
「復讐？」
「……俺も明日の聞き込みに行っていいか？」
「えっ？」
　千代は驚いたようにしているが俺は気にしない。
「うん。いいけど。珍しいね空太くんがみずから。」
「いや。なんとなくだけど、多分大体の手口は分かったんだよ。」
「本当か？」
　ガタンと和人は大きな声を上げる
「あぁ。……少しだけ心辺りがある。というよりも不自然なことが多すぎる。」
「不自然なことですか？」
「あぁ。明らかに変なんだよ。まず一つ目金属鎧にマント。この組み合わせはほとんど

ありえない。マント装備って普通は敏捷アップと回避効率。それと隠蔽効果だろ。」
「……それが何の意味が。」
「ここからは憶測だけど、多分転移しただけなんじゃないのかな？」
「転移？」
　アスナは首を傾げる
「そうそう。確か転移エフェクトとゲームオーバーのエフェクトって同じだろ？β版の時からずっとみているけど結晶エフェクトを使って死亡を演出する。マントを装備してたのも多分誰にも見られないように二回に行くことだ。」
「どういう？」
「……元々圏内ＰＫは存在せずに、元々は何かの理由があって圏内ＰＫを演出していたってことか？」
　キリトは答えを出す。
「あぁ、……さすがにおかしいだろ。このゲーム無駄に公正でバグが少ない。茅場は正々堂々と挑んでいるわけだし。それなのに圏内ＰＫっていう致命的なバグが生まれている。」
「…確かにありえないことだけど……よく考えたね。そんなこと。」
「てか、根本的にゲームシステム的なことを考えるとありえないんだよ。逆に元からカ

インズが生存していると考えてみれば簡単に答えが分かる。まぁ、俺はその場からいなかったからだろ。俺はそれにゲームシステムはＳＡＯは憎たらしいほど優秀だしな。バグがないと考えたら答えはＰＫに見せかけたトリックは簡単に考えつくだろ。」
「普通は考えられないと思いますが。」
俺は首を傾げる
「いや、だってこれβ版で実際あったことだし。」
「「「えっ？」」」
すると驚いたようにしている。
「元々は始まりの街かリスポーン地点に転移するだけだったから同じエフェクトになんだし、だから間違えてもおかしくはないってこと。まぁこれは俺しか知らなかったのか。てっきり和人辺りは気づいていると思っていたけど。」
「俺はゲームに入りぱなしだったからあまりネットは見てなかったからな。」
うわぁ。俺がいえたことではないけど、お前の私生活もひどいな。一応俺孤児院の仕事もあったから深夜帯以外は３時間に一辺はログアウトしてたぞ。
「とりあえず今回も多分転移だと思うんだけど。」
なんか引っかかるんだよなぁ。
なんというか今回の件睡眠ＰＫの時とやり方は似てないるって思うし

「……うん。決定、キリト、アスナ、ケイタは手口をバレていると気づかれないようにそのヨルコさんと接触して。んで、なるべく遠回しに何があったのかを報告しあうこと。俺とサチとは風林火山のホームに行く。」
「風林火山ですか？」
「あぁ、正式に協力を頼む。それとアルゴに聖竜連合を監視してもらうように頼む。…みんなには働いてもらうぞ。本気でこれを解決しないとまずい気がする。」
「「了解」」
「んじゃ明日7時に一度ギルドハウスに集合、そして昼飯にお互いの動きを報告し合うってことで。」
「分かりました。」
「ピゥルル～♪」
　するとピナが飛んできてまた俺の頭に乗っかる
「ちょっとピナ。」
「……なんかピナ俺の頭ばっかりにいるよな。」
「うん。今日もシリカちゃん泊まっていくことになりそうだね。」
「いや、元々誘うつもりだったからな。」
「えっ？」

驚いたようにしているシリカだけど

「というより全員今日はギルドハウスに泊まった方がいいだろうな。一応俺の推理が外れた場合、多分何らかのバグがリアルの方で問題があったのか知らないけど。それでも危険であることには変わりない。」

「……そうですね。僕も泊まります。」

「そうだな。確証が取れていない時に個人で行動しても危険なだけだし。俺も賛成だな。」

すると全員が頷く

そうやって俺たちはこの事件の解決に取り組み始めたのだった。